

本間正義教授の最終講義を聴きながら

— その道程の周辺，長すぎる備忘録 —

山 村 英 司

は じ め に

2021年12月17日，福岡。本間正義教授¹⁾の最終講義を聴講した。本間教授の高校時代から研究者として道程。その内容の過半を19年前に聴いたことを思い出す。東京都立大学の博士課程の院生だった私が，西南学院大学で講師として採用されることが決まった直後のことだ。速水佑次郎ゼミのOB会で本間教授と出会い，就職先が決まったことを伝えた。そして，地方の私立大学で働くにあたってアドバイスをいただいた。そのおりに，個人的に本間教授の道程を聴くこととなったのだ。都立青山高校在学中に学生運動が巻き起こったことがきっかけで北海道にわたり牧場で働いたこと。アイオワ州立大学留学時代の苦労話。速水先生との共同研究。都立大，小樽商大，成蹊大学さらに東大へと渡り歩いた経緯。足を踏み入れたことのない九州の地での研究生生活に不安と期待を持っていた私に



アドバイスを受けた当時の本間正義教授のイメージ

1 本稿では識別のために，直接の師弟関係がない場合は「先生」という敬称は使わない。師弟関係がある場合でも，文脈によっては敬称を使わない箇所もある。

として、非常に励みになる温かい言葉だった。その後、西南学院大学で同僚として勤務することになったのは人生の不思議。

本間教授が講演で説明されたように、アイオワ州立大学の研究室で速水佑次郎と本間教授は兄弟弟子。実のところ、私は速水佑次郎の弟子でもある。したがって、私にとって本間教授は遠地で活躍する叔父のような存在である。速水ゼミ OB 会で邂逅した時の本間教授には野性味あふれる印象がある。現在の私はほぼ同年齢である。déjà vu（既視感）に包まれながら、繰り返される物語。本間教授が助手時代を過ごした都立大は、私が博士課程を過ごした場所でもある。私は本間教授の道程の周辺を歩いていた。私の大学院時代を中心に私的経験を綴ってみよう。

1 章 速水佑次郎先生との日々

1-1. 速水佑次郎との出会い

私は速水ゼミに所属したこともなければ、速水先生が在職した大学の学生だったことさえない。かといって二セ OB という訳でもない。早稲田大学の修士課程だった頃に、モグリの院生として速水先生の院生指導の講義に出席し、教えを受け修士論文を完成させているのだ²⁾。速水先生との出会いがなければ研究者になることもなかったであろう。人生の分岐点で出会った最大の恩人。それが、速水佑次郎なのである。

最終講義で説明されたように本間教授の学術的代表作、農業貿易の政治経済分析は速水先生との共同研究の成果である（Honma and Hayami 1986）。国際経済分野の最高峰の学術誌 *Journal of International Economics* に掲載され、これがきっかけで本間教授は農業を中心とした国際貿易の現場でオピニオンリーダーとなり、多大な貢献をしてきた。その意味で、本間教授の道程の中で速水教授は大きな意味を持つ人物であろう。

私の記憶に残る速水先生やその関係者との交流について書き留めておこう。

2 この修士論文は長年刊行されずにいたが、西南学院大学の講師になってから、加筆したものを刊公にした（山村英司 2004）。

バブル景気の只中、北海道から「一旗揚げろ」ために上京してみた³⁾。そしていつの間にか、私は気儘なバックパッカーとして大学時代を過ごした（山村2020）⁴⁾。卒業後もしばらくは海外を放浪していた。帰国してから、芸術家になろうとした時期もある。当時、母校の早稲田には風変わりな人間が多数存在していた⁵⁾。普通に就職せずに、自由人としての生活続ける方法として思っていたのが、研究者である。学際的な教育をしていた社会科学部で、アジア地域研究をするゼミに所属していた。当初は文化人類学などに興味があったので、一般向けに多数の著書があり奇人として知られた文学部の西江雅之教授に連絡を取ろうとしたこともある。いろいろと探りを入れてみると、文化人類学ではメシが食えないことが判明した。そこで、最もメシが食えそうな早稲田の経済学の大学院に進学することにした。浪人、留年、自由人生活を経たため、その

3 道産子の私であるが、東京の遠戚には幾人かのロールモデルがいた。父方の祖父の従弟は小林恭治という声優であった。アニメ『おそ松くん』のイヤミ（初代）、『巨人の星』の実況アナウンサー、『太陽にほえろ!』の次回予告の声全部、往年のアメリカ製ドラマ『名犬ラッシー』のお父さんの声、そして洋画のアテレコではロバート・ミッチャムの声をよく担当していた。昭和の声優第一世代に属する大ベテラン。私が子供の頃はNHKの番組でもその声をよく聴いた。遠くの世界にいる憧れの人物であった。ちなみに、小林氏の娘は、日テレのキャスターの小栗泉氏で、オバマ大統領が広島原爆ドームに訪れたときには生中継の司会進行をしていた。徳島県出身の父方祖母の従弟は政治家だった。中曽根派で元厚生大臣の森下元晴氏である。中学時代にテレビに映る遠戚に刺激を受けたためか、早稲田大学に入学後に政治家を多く輩出していた「雄弁会」を訪問したこともある。彼らは一年に2回も幹事長を決める選挙をしており、サークルの中に「派閥」もあるようだった。すぐに政治世界が嫌になった。西南学院赴任後に知ったことだが、私とほぼ同年代の又従弟は高知県議になっていた（土居央氏）。

4 早稲田大学在学中は周囲に興味深い自分が多くいた。社会科学部ゼミの同期生には早実野球部の投手で甲子園に出場した小川聡がいた。甲子園では津久見高校と対戦し、ヤクルトで活躍する川崎憲次郎の球を打ったという（凡打だったらしい）。小川には、私がバックパッカーから帰国後に体験記を出版することを提案された。早稲田人は話がでかいが、どこか現実味を帯びている。小川は『読売新聞』でアメリカ総局長、ワシントン特派員として活躍し、現在は政治部次長となる。私は大手新聞社を2〜3社受けたが当然のごとく落ちた。

5 サークル仲間では第二文学部財学区中から大手ゲーム会社の正社員としてゲーム音楽を制作していた男がいた。専門の音楽以外にも、コンピュータ、演劇、文筆など何でもできる才人だった。卒業後のある日、喫茶店で仲間にバカ話を披露しているところを、NHKの関係者にスカウトされ正社員になった。NHKのディレクターを経て広報担当「中の人」として活躍する。独立後は作家の麻生鴎（ペンネーム）となり糸井重里氏ら文化人と交友している模様。

時私はすでに28歳になっていた。

実際に「入院」してみると、大学院で扱われていた内容に納得できないものを感じた。当時の早稲田は「学生一流、設備二流、教授三流」と揶揄されていた⁶⁾。掴みどころのない抽象論に興味を持つことが出来なかった。悶々とした日々を過ごしていると、研究室の先輩に「自分の先生は自分で探せ」とアドバイスを受けた⁷⁾。ヤル気のある院生は、形式的に早稲田に所属する一方、実質的に学外の研究者のもとで研究に励んでいるという⁸⁾。私の師匠探しの旅が始まった⁹⁾。

修士一年目の秋口のこと、早稲田でアジア政経学会の大会が開催されていた。パネル討論に聴講すると、報告者が3～4名いた。一人だけ輝いて見えた研究者がいた。名は速水佑次郎。早速、出版したばかりの初版の『開発経済学 諸国民の貧困と富』（速水 1995）を購入し熟読した。最終章では共同体の合理性を議論していた。文化人類学と経済学を混ぜ合わせたような斬新な内容であ

6 現在の早稲田大学の政治経済分野のスタッフは大きく入れ替わり、一流教授も多数在籍している。40代の東大教授が移籍してくるような状況である。私が在籍した1990年代とは隔世の感がある。

7 1980～1990年代において早稲田の学生の間では、西川潤教授と川勝平太教授（現・静岡県知事）が2枚看板とされメディアにも頻繁に登場していた。とりわけ発展途上国研究を進めていた西川教授と私の関心は近いように思われた。メシを食うためには有名人に学べばよいという単純な考えから、修士は西川研究室に所属した。西川ゼミには早稲田政経で最も優秀な学生が集まると言われた。実際に西川ゼミOB名簿には、あらゆる分野で活躍する人物が勢ぞろいしている。当時、修士の院生仲間の中で話題になっていた人物として、TOEICなどで満点を取りゴールドマン・サックス証券で活躍するスーパーウーマンがいた。アカデミックな地味な世界とはかけ離れた華やかな世界である。面識はないが印象に残る人物であった。このビジネスパーソンはその後、アカデミック世界に方向転換をする。American Economic Review など一流誌に論文を掲載し日本経済学会から中原賞をおくられた北尾早霧氏（現・東京大学教授）である。

8 私が所属していた頃の西川研究室の先輩には広瀬巖氏がいた。広瀬氏は非公式に一橋の鈴木興太郎教授の研究室に出入りしていた。彼は東京銀行でディーラーの仕事をしていたが、アカデミックに転身してきた。肉体派であり異常に発達した大胸筋と、学問的な野望を語る姿が印象に残る。当時、広瀬氏は厚生経済学の理論を研究しており、鈴木教授から留学先を紹介され、University of St Andrews で博士号を取得した後、University College, Oxford (2003-6)、Harvard University (2006-7) など活躍し分析哲学者として頭角を現し、その道の世界的な研究者となった。広瀬氏は現在、カナダの McGill 大学の哲学科の教授である。

9 修士時代は帰宅の途上にある新宿駅で下車し、ゴールデン街のバーに立ち寄ることもあった。バックパッカーの習性が抜けなかったのである。

る。修士論文のテーマをそこに定めた。次に弟子入りする方法を考えた。『開発経済学』の最終章部分を熟読し自分なりに理解した上で、修士論文のアイディアをまとめた文書を送った。その内容を発展させるために速水教授の研究指導を熱望する手紙も添えた。藁をもすがる思いだった。

数週間後に速水教授から直筆のハガキが届いた。フィリッピンへの出張から帰国後に私の手紙を読んだために、返信が遅れたことなどが記されていた。そして、青山学院大学の社会人向けの大学院の講義に出席するように提案された¹⁰⁾。言葉通りに講義に出席した。講義の後に挨拶をしてから、お礼を伝えた。帰途につきながら、私の研究アイディアに関して質疑応答があった。私から簡単な趣旨を説明してみた。

速水教授：「それで君のコントリビューションは何なのかね？」

エレベーターの中で二人になると問われた。おそろおそろ、返答する。

山村：「***をしようと思います」

瞬時に返事がかえってくる。

速水教授：「それは###と%%%が既にやっている」。

山村：「¥¥¥をやろうと考えています」

速水教授：「それも既にやられた研究だ。君のコントリビューションをききたい」

いつの間にか、エレベーターを降りて1階のホールにいた。目の前にある顔がわずかに紅潮していた。

速水教授：「よかったら、来週から研究者向けの院生指導の授業に来るように」

私の知識のすべては速水先生の著書から得ていたわけで、そこから出てくる発想は速水本の範囲も一歩も出ていない。一方、経済学の基礎教育を受けていない私が『開発経済学 諸国民の貧困と富』の最終章を隅々まで読んでいることにも気付いたはずだ。ヤル気だけは、認めていただいたということである。すでに25年近くも経過するが、その時の情景は、ほんの数分前の出来事のように鮮やかに思い出すことが出来る。初めての速水先生とのやり取りは、今も研究論文を書く時に蘇る。

10 1998年当時、速水先生は東京都立大学経済学部から青山学院大学の国際政経学部に移籍されていた。

1-2. 速水佑次郎の教え

速水先生が東京都立大学を退官した後に着任した青山学院の国際経済学部には、速水先生以外にも経済学世界のビッグネームが在籍していた。速水研究室の同じフロアに、小宮隆太郎氏（東京大学名誉教授）、根岸隆（東京大学名誉教授）などの伝説的研究者の研究室があった。その傍らを通り過ぎ速水研究室へ足を運ぶ間に緊張感が高まる。

速水先生の指導は学問的に非常に厳しかった。自分が報告するときなど、指導開始前に緊張のあまり吐気に襲われ、トイレへ駆け込んだこともある。多弁ではないものの、出てくる言葉は的確で研ぎ澄まされ、急所を突く。ある日の研究会で報告者の先行研究の紹介が要領を得なかった時に、速水先生が叱った。

「君たちは、論文を読んでるつもりだろうが、読んでいるうちに入らない。漫然と読んでも時間の無駄。常に獲物を探す目で論文をみるのだ」

研究の具体的スタイルについての指導も印象深い。深夜まで時間を使った研究は、大概是二流である。研究計画の設計に失敗しているために、時間が間に合わない。そのために、知的創造性が低下する深夜まで時間をかけることになる。研究計画の時点で失敗する研究者は二流なので、その人が書いた論文は読む価値はない。これは現在、行動経済学で研究されている先端トピックにも関連する視点である。

青山学院大学の院生や助手など、私を入れて4～5人が出席していた。出席者の報告を聴きながら、基本概念の定義の説明を求めることがしばしばあった。教科書的な説明をすると、さらに説明の中で用いた基本概念の説明を求められる。最終的に自分の言葉で平易に説明できるまで追及は続くのだ。その問いかけに及第することは稀であった。高度な議論になるほど、基本の概念の理解の差が顕著になる。そのことを学んだ。当時は厳格な論文審査を経て、日本人でトップジャーナル（American Economic Review, Journal of Political Economy, Quarterly Journal of Economics など）に論文を掲載した研究者の大半は理論家だった。数学の証明が核になるので、英語の文章力はそれほど重要ではない。数式で表現した内容が全てで結果は明瞭である。議論の余地がない。

速水先生は上記のジャーナルすべてに論文を掲載していた。しかも、農業経

済の実証研究という地味な分野である。速水先生よれば、トップジャーナルに実証論文を掲載するには、海外の研究セミナー等に出席し、大物研究者から質問攻めに対し、彼らが納得するまで説明しなければならないという。アメリカの研究者は論文を読むだけでは決して納得しない。その過程で多くの者は撃退される。速水先生が話す英語は流暢とは言い難かった。そのハンディを克服するには、論理的で簡単明瞭な表現で説明する必要があったのではなかろうか。その経験が、院生指導のスタイルにも反映されていたと思われる。

速水先生のカテゴリー分けでは、二流以下の研究には2種類に大別できるといふ。一つは、自分の考え方に凝り固まった研究者。自分の主張に明らかな誤りがあれば、その原因を探り、新たなアプローチをとることが必要という訳である。二つ目は、事実を羅列するばかりの研究者。情報を整理しながら、それを鍵となる概念と結びつけ、仮説を検証する。さらには研究を貫くストーリーがなければ、読者の記憶に残るものはない。

研究者になるための基本姿勢のアドバイスも含蓄が深い。常に自分の外部に自分を持ち、他人の視点から自分は正しいのか間違っているのかを観察すること。好奇心をもち、何気ない発見にも驚く新鮮な気持ちを持ち続けること。過去の研究よりも、最先端の研究を読むこと¹¹⁾。「身の回りのこと、目の前に起きている現象。これを説明できたら一流の研究者だ」印象に残る速水先生の言葉である¹²⁾。その影響受けたためか、私の研究対象がすべて身近な話題である。

1-3. 速水佑次郎の研究姿勢

確かに速水先生には通常の研究者ならば見過ごすような事柄を驚き楽しむ好奇心、思考の柔軟さ、視野の広さ、感性の鋭さがあった¹³⁾。私の分析対象はアジアの農村のような共同体の合理性の解明であった。速水（1995）でも論じられているように、理論的にはゲーム理論のフォーク定理の枠組みでそのメカニ

11 なぜならば、最新の論文には、過去の研究成果が組み込まれているから。先端の研究を読めば過去から現在までの研究全体を俯瞰できる。

12 これは、速水先生が Schultz から学んだことであろう。その精神はその後シカゴ大の Becker, Gary（第23回ノーベル経済学賞受賞、1930年生まれ）、そして Levitt, Steven（ジョン・ベイツ・クラーク賞受賞者、1967年生まれ）へと受け継がれていく。

ズムを解明できる。速水先生は実証分析の専門家で、70歳近い年齢であった。それにも拘わらず、私にすすめる文献の中には先端のゲーム理論の紹介論文もあった（Matsui 1996）。実証研究者であるが、先端の理論研究にも関心を広げ、その価値を的確に評価する能力は突出していた。

ある日、指導前の時間に研究室を訪れ、研究上の相談をしたことがある。共有地の管理には、リスクの問題が関係するはず。しかし、主観的リスク認知それへの態度は、時間を通じて変化する可能性がある。たとえば、牧草が豊富にある時にはリスク愛好的にふるまっているだろうが、牧草が減少していくにつれてリスク回避的になるだろう。このような考えに対して、コメントをいただいた。速水先生は興奮気味に非常に面白い視点である感想を述べた。今考えれば、この視点は現在私が研究する行動経済学と深く結びついている。

非常に柔軟で緊張はするが、指導時間は非常に愉快でもあった。速水先生が私の研究の最初の理解者であった。修士論文の中で出発点になるのは、James Scott と Samuel Popkin の間にあったモラルエコノミー論争だ。詳細は省くが、ここで重要になるのが、社会メンバーと一緒に目的達成のために行動（Collective action）である。これに関する最重要文献が Olson（1965）である。Olsonによれば、フリーライダーを抑止し Collective action を成功させる条件は、少数のメンバーによって集団が構成されていることである。

James Scott（1976）と Samuel Popkin（1979）の議論の整理や、Olson の理論とのかかわりなどについて、速水先生は私が出会った時点からさらに15年以上前に論考していた（Hayami and Kikuchi 1981）。その本を熟読したうえで、不

13 私は研究を通じて直接やり取りしなければ、研究者の資質や能力を知ることが出来ないと考えている。速水先生のような特質を持つ研究者に出会ったことは殆どない。例外は、現在共同研究を進める大阪大学の大竹文雄教授である。専門、年代、関東と関西の地域性など多くの違いはあるが、大竹氏と研究に関するやり取りをする時、速水先生を思い起こす。速水先生は速水（1995）の中で大竹氏の論文を引用している。速水先生は30代前半の若手研究者だった大竹文雄の力量を見抜いていたと思われる。さらに、2人の間には意外な接点がある。速水先生はテニスの達人であり、大竹氏もテニスをたしなむ。在外研究中に2人は出会い、テニスを楽しんだという。大竹氏から聞いた秘話によれば、大竹氏は速水先生をテニス場へ送迎する運転手役も兼ねていたという。ちなみに速水佑次郎は「テニスの先生」で、研究の話は一切したことがないという。

明な点を私が質問したことがある。かなり昔に書いていることであるにも関わらず、速水先生は最近執筆したことのように、具体例を挙げながら正確に論点を整理し、全体のストーリーを説明された。あまりにも明快な応答に、驚いた。複雑に入り組んだ論点について理解を深め全体像を把握できたのは、速水先生の説明のおかげであった。

Olson (1965) は Honma and Hayami (1986) においても、重要な概念として援用されている。本間教授の最終講義で初めて知ったことであるが、論文執筆前に速水先生と本間教授は上記論文のアイデアを Olson に直接説明し、好意的なコメントを受けている。速水先生が、Olson 理論を血肉化していた理由が、20年以上の時を経て分かったのである。

速水先生は60代に入ってから、独自理論を構築する強い意志を持っていた。私が出会った頃は、速水 (1995) で提示したように、「国家、市場、共同体」の補完関係により、国家の失敗、市場の失敗を補正する雄大な社会科学のモデルを提起していた。私はこのアイデアに大きく影響を受けた。修士論文で取り上げたのは、この中の「共同体」について。時間の経過とともに、枠組みは価値を高めたと考えている。四半世紀を経た今現在も、国内開発経済学の第一人者である澤田康幸之氏は、この枠組みの中で自身の研究を展開することがある。2021年の日本経済学会の会長講演で大垣昌夫会長が示したパースペクティブも速水理論がベースになっている¹⁴⁾。さらに、シカゴ大学のラジャン教授が近年あらわした書籍も速水理論とほぼ同じだ (ラジャン2021)。速水先生の先を見通す力量は突出していた。一時期の流行学問とは一線を画す風雪に耐えうる研究である。研究世界で、速水佑次郎は今も生きているのである。

1-4. 速水佑次郎の修業時代

年度の終わりの研究指導が終わった後、速水先生としては珍しく院生に宴会の提案がなされた。青山から渋谷駅に向かう途上に位置する居酒屋で普段はきくことのない話をうかがうことが出来た。

14 数年前に、私は個人的に大垣教授と速水理論について議論したことがある。

速水先生は東大では教養学部在学し、経済学を学ぶことはなかったという。卒業後に農林水産省に入省し、配属されたのが農業総合研究所。所長は東畑精一だったという。速水先生よりも30歳以上年上の日本農業経済学の祖のような研究者である。ある日、アメリカから客人が来たので、通訳兼世話係を命じられたという。何とか仕事をこなしたところ、「アメリカへ留学してみないか？」と提案されたという。アメリカへの憧れは強く、喜んで留学することにした。留学先は農業経済学が盛んなアイオワ州立大学で、そこで初めて「経済学の基礎をいやというほど叩き込まれた」。日本に帰国後に大川一司が率いる一橋大学の長期経済統計プロジェクトに参画する。「大川先生は、それは怖かった。君たちは僕が怖いというけど、大川先生は比べ物にならないくらい怖いよ」と笑顔で語った。

国際学術誌に論文を掲載し研究者としてのデビューしたのは30代になってから。American Economic Review (Hayami and Ruttan 1970a), Journal of Political Economy (1970b), Quarterly Journal of Economics (Hayami and Ruttan 1970c), に、たて続けに論文を掲載したのは30代後半だったという。しかし、本当に英語が書けるようになったのは、アメリカで滞在中に集中的に書籍を執筆した後だという。

一気に世界の超一流研究者となった速水先生は、数多くのレジェンド研究者と交流した。最も高く評価する研究者を訊ねると、3人の名を挙げた。

Theodore, Schultz (第10回ノーベル経済学賞受賞：1979)

Kuzunetz, Simon (第2回ノーベル経済学賞受賞：1971)

Arrow, Kenneth (第3回ノーベル経済学賞受賞：1972)

Theodore, Schultz は速水先生と同じく農業経済学者である。本間教授の最終講義でも紹介されたように、シカゴ学派の主導者で、ノーベル賞受賞者でもある。Schultz は1902年生まれで、同じくシカゴ大のノーベル賞受賞者の Stigler, George (1911生) や Friedman, Milton (1912生) よりも10歳ほど年長でシカゴ大学経済学部の学部長を歴任している。シカゴ学派形成期の主導者である。

速水先生によると、アイオワ州立大学で書いた博士論文を宣伝するために、全米の有力教授に論文を送り付けたという。無名の若手が書いた博士論文に対

して、ほとんどの研究者からは反応がなかったという。例外的に返信があったのが、シカゴ大学の Schultz 教授で、論文を高く評価してもらえたという。中者研究者たちからは無視されたが、最高の大物は評価してくれた。そのような秘話とともに、Schultz は現実を論理的に分析する能力が抜群だったと評価した。Kuznetz は泥臭いが手堅い実証分析をする能力を評価し、これら 2 人とは全く異なる観点から、Arrow の天才性を評価していた。まさに三者三様だが、この 3 人は甲乙つけがたいとのことであった。

1-5. 速水佑次郎が提案した私の進路

当初は早稲田の修士の後には、青山学院の国際政経の博士課程に入り速水先生の指導を受ける目論見であった。博士課程の学生としての受け入れを願い出てみた。速水先生からは、より若く精力的な研究者のもとで研究を進めるようアドバイスされた。速水先生は、おもむろに板書を始めた。

“Elinor Ostrom”

共有地理論の専門家である。私を紹介していただけるという。海外では有力研究者の推薦状があれば奨学金獲得などチャンスが広がる。特に Hayami の推薦状の効果は絶大である¹⁵⁾。後に Ostrom は女性初のノーベル経済学賞を受賞する。速水先生は、そのことを予知していたような気もする。しかし、私はすでに30歳近く。海外留学する時間的な余裕はない¹⁶⁾。そのことを説明すると、次に板書したのが。

15 速水先生の一番弟子の大塚啓二郎先生の逸話を紹介しよう。大塚先生がシカゴ大学に留学するに際して、Hayami の推薦状を提出した。それをみた、Schultz 教授（ノーベル賞受賞者）は大塚先生に私的に奨学金を出したという。

16 都立大学の博士課程に入ってから、私の周囲にいる研究者の大半は、欧米の Ph.D 取得者であった。しかも、直属の師匠となった大塚先生はシカゴ大、園部哲先生はイエール大である。したがって大塚ファミリーと付き合いがある研究者は大概、米国の名門大 Ph.D 取得者であった。たとえば私の同年代であれば、澤田康幸氏（東大教授、スタンフォード大 Ph.D）や戸堂康之氏（早大教授、スタンフォード大 Ph.D）である。おまけに、大塚研究室の後輩の真野裕吉君（一橋大学）も、Lucas 教授（第23回ノーベル経済学賞受賞、1995年）の指導を受けシカゴ大学で Ph.D を取得した。私からすると全く異世界の人々であり、圧倒的な能力の違いを見せつけられた。あまりに出来が悪いので、師匠たちには質問することも出来ない。なので、院生仲間に経済学の基礎を教えてもらっていたのである。

「大塚 啓二郎」

東京都立大学の教授で、速水先生の一弟子である。その推薦通りに、私は都立大学の博士課程に入る。速水先生とは質の異なる強烈な個性の持ち主。それが、大塚啓二郎先生という人物である。後に学士院会員となり、先日は瑞宝重光章を受けた¹⁷⁾、さらに皇居にて行われる「講書始の儀」進講者を務めた¹⁸⁾。本間教授より数歳年長で、速水先生の一弟子。シカゴ大 Ph.D の大塚先生は前述の Schultz の愛弟子でもある。当時は速水ファミリーからスピノフし大塚ファミリーを形成し、世界各地の比較経済の大規模プロジェクトを主導していた。ひょんなことから、私はその只中に飛び込むことになる。1999年の春先のことで、私は30歳になっていた。

都立大博士の大学院入試へ出願後、大塚先生に電話を入れた。非常に不機嫌で、博士の院試はフェアに判断するとだけ告げられた。あまりにも電話の印



瑞宝重光章の荣誉をうけた大塚啓二郎先生

17 省庁なら元次官か元次官級審議官，外交官なら元大物大使。春と秋に，30名くらいが受章。2020年秋は大学関係者が7人。3人は元学長，3人は元研究所長。

象が悪く、一時は試験を受けるのをやめようとも考えた。速水先生に電話でのやりとりを伝え、受験を取りやめようと考えていることを伝えた。速水先生は困ったような顔をしながら、とりあえず受けることをすすめられた。一方で落とされた場合の手段を考えることになった。

速水先生はあとわずかで、政策研究大学院大学へ移籍するし、青山学院の博士募集もすでに締め切られていた。名義だけ、早稲田の博士に入って、速水先生のもとに通うか、翌年再度都立大の大学院入試を受ける案も浮上した。そのためには、速水先生と面識がある研究者が良いということになった。早稲田の秋葉弘哉教授は都立大学の大学院で学びニューヨーク大学 Ph.D をとっていた。American Economic Review にコメント論文を掲載したこともある人で、早稲田では珍しい本格派だった。しかし、国際マクロの研究者なので、私の関心とは全く異なり授業をとったことがない。指導は厳しいとの噂があり、実際に知り合いの秋葉研究室の院生は中退していた。速水先生に知っているか質問すると。ニコニコしながら「知ってるよ」とのこと。

秋葉教授に連絡を取り、秋葉研究室で面談した。ドアをノックして入室すると、コンピュータに向かって何かを書いていた。身長は180センチを遥かに超え、パンチパーマ風の頭髪で口ひげを蓄えている。漫画「花の応援団」の主人公によく似た風貌で声も大きく迫力がある¹⁹⁾。到底学者には見えない秋葉教授の真向かいに座り、詳しい状況を説明した。

18 新聞の報道では

「天皇陛下が各学問分野の第一人者から講義を受けられる新春恒例の皇室行事「講書始の儀」が14日午前、皇居・宮殿「松の間」であった。昨年と同様、一緒に講義を聴く招待者の数を減らすなど新型コロナウイルスの感染防止対策を講じて実施。講義したのは御牧克己・京都名誉教授（74）＝インド・チベット仏教学＝ら3人で、秋篠宮さまをはじめ皇族方7人も出席した。皇后雅子さまは体調が整わず欠席した。（中略）大塚啓二郎・神戸大社会システムイノベーションセンター特命教授（73）＝開発経済学＝が「アジアからアフリカに広がる日本の稲作技術」、金出武雄・米カーネギーメロン大ワイタカー記念全学教授（76）＝コンピュータービジョン・ロボット工学＝が「人工知能」と題して講義をした。

講書始の儀は明治天皇が学問奨励のために開いた「御講釈始（ごこうしゃくはじめ）」に由来する。戦後の1953年からは人文、社会、自然科学の3分野を代表する学者が説明する形となった。」（『毎日新聞』2022年1月14日）

19 大塚先生によるとフィリピンで調査をしている時に、秋葉教授が遊びに来たので飲みに出かけたそう。店でフィリピン人から日本のヤクザと間違われたという。

「速水さんのところに入出入りしているのか。君のような学生が早稲田にいたのか」と驚いていた。「速水、大塚は日本よりも、本場アメリカで有名な人だ。私もアメリカの学会に行けばよく話題になる」という。そして「俺たちが都立の院生だった頃は、速水さんはビリビリして近寄ることが出来ないくらい怖かった」と回顧する。

大塚啓二郎の人物像を訊くと身振り手振りで、「大塚か！あの分野では、速水の時代は過ぎ、大塚が天下をとっているだろう」。秋葉教授によれば、大塚啓二郎は都立修士時代の一年後輩で、少人数教育の都立大の大学院で共に学んだ仲だという。私に対する厳しい言葉については、「大塚ならそれぐらいのことは言うだろよ。都立と早稲田の状況はかなり違う。君が都立に入ったら相当苦労するのは間違いない。覚悟しといたほうがいい」私を哀れむような眼をした。

「俺も大塚も、アメリカで苦労をしたが、たまに遊びに行き来したこともある。大塚は奥さんと一緒に車を運転してやってきたよ」と遠くを見るような眼をした。「そういえば、大塚からの献本があった。貸してやるから読んでみると良い」。秋葉教授が本棚を探している間、コンピュータに目をやった。英語の文章と数式が画面に映し出されている。

秋葉教授から手渡された本には、“The Economics of Contract Choice”と記されている（Hayami and Otsuka 1993）。農村の地主と小作人の間の契約形態について分析した研究であり、契約理論の先鞭をつけた研究として知られる。表紙を開くと、毛筆で「学友へ」と豪快な筆跡で秋葉教授への献辞が記されている。研究室を辞去する際に、秋葉教授が苦悶に表情を歪めながら語った言葉は印象深い。「研究者になって研究論文を書くということは、血を振り絞るような作業だ」。研究室の扉を閉めながら目にしたのは、論文執筆作業を再開する秋葉教授の孤独な姿だった。

1-6. 博士院試

博士試験は(1)修士論文への評価、(2)語学、(3)面接によって、行われた。語学の試験の後に、面接を受けた。正面に大塚先生と思われる主査と、あと二

人副査がいた。若手の男前と、主査と同年代で小柄で物静かな人物。主査からは海外で調査をする機会が多いので、語学能力が必要だと告げられ、自信のほどを問われた。「何とかやれそうです」と返答をする。若手副査は博士の後のプランを問われる。おそろおそろ、「どこかの研究所に勤めることが出来ればと考えてます」とこたえる。この時点では、大学のポストを得ることが出来るとは思っていなかったもので、何か食べていくことが出来ればと考えていた。「アジ研（自アジア経済研究所）みたいなところ？」と確認された。それが実現できるように努力しますとこたえる。もう一人の副査は、計量経済学を勉強したことがあるかをきかれた。実際には勉強したことはないが、定番とされる入門書を読んでいるところだとこたえる。想像よりは、あっさりと面接は終わった。

2章 大塚啓二郎先生の特訓と、学問虎の穴で邂逅した研究者群像

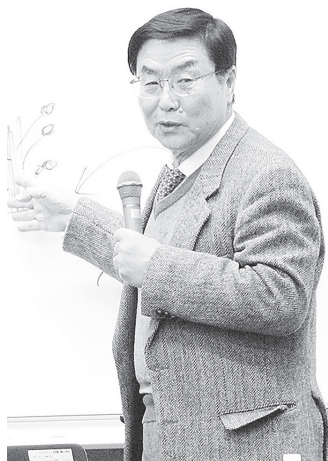
2-1. 三分間で決まった博士論文テーマ

心配された都立大の院試にはなんとか合格することができた。入学前に私に電話がかかってきた。学部を卒業したばかりで、4月から修士課程の院生として大塚研究室に入るといふ。大塚教授から私への伝言を託されていた。大塚教授は大規模プロジェクトを開始しており、私もその研究会に参加せよということで、研究会の日時と場所を教えられた。

当日を迎え、決死の覚悟で研究会に赴いた。

部屋の中で緊張しながら待っていると、大塚先生が勢いよく教室に入ってきて第一声。「読んだよ。これは大変な労作だ」²⁰。初対面の大塚教授がテーブル

20 博士入試では、語学の成績は無残なものだったが、修士論文が評価され合格となった。データも数式も使っていなかったもので、学術誌に掲載できるような内容ではない。しかし、論文には魂を込めたので、それが先生達にも伝わるようだ。大学院入学後に知らされたことだが、大塚先生は読んでいううちに、ヘビーな内容に汗が流れてきたという。園部先生の印象は、様々な論点への言及と紹介が最後は一つに収斂していく過程に迫力を感じたという。その論文の印象を、松本さんや真野君に語っていたという。大塚先生、園部先生は修士論文の中に私の研究者魂を感じ取っていたのかもしれない。経済学の基礎は欠如しているが、修士論文の中に私の研究者としての潜在能力を見出していたのだろう。



躍動する大塚先生



ド迫力の大塚先生

の上に私の修士論文を置く。赤ペンで無数の添削が施されている²¹⁾。次に別の文書がおかれた。「これが君の仕事だ。園部君の予備調査のトリップレポートを読んでおくように」。大柄で恰幅が良く、エネルギーが溢れている。圧倒的な勢いの良さである。当時、大塚先生は農業から製造業へと分析対象を広げていた。アフリカの土地管理の比較研究を終了し、前年より中国、台湾、日本の製造業産地の比較研究を開始していた。大塚先生は50代前半で、精力的に仕事を進めていた。Paul Krugman や藤田昌久教授が構築した「集積の経済」モデルを実証研究に導入し、アジアの経済発展段階の比較をするという構想を持っていた。

大塚先生の横には、30代後半の園部哲史助教授が座っている²²⁾。面接のときの副査の一人である。大塚先生の右腕で、広島県の備後地方の縫製業の予備調査を大塚先生と行っていた。研究会の冒頭の3分間で、私の博士論文の研究テーマが確定した。研究会の参加者は他に、博士二年の松本朋哉さん（現・小

21 後に知ることであるが、速水先生も大塚先生の学生時代の論文に、非常に丁寧な赤ペン指導があったという。同じことを、大塚先生は私に施したという。

22 政策研究大学院大学教授、副学長を経て、現在はアジア開発銀行研究所所長。

樽商科大学教授)や修士一年の真野裕吉君(現・一橋大学准教授)がいた。私に電話をかけてきたのは真野君で、都立大開学以来の秀才と謳われていた。大塚先生が英才教育のため、学部生の頃から修士課程の授業をとりプロジェクトに参加していた。

速水先生には旧制高校風の教養的知性を感じた。非常に野心的であったが、数々の賞の榮譽に浴しても、それをおくびにも出さない。古風な日本人の趣があった。どこか懐かしい何かを感じていた。これとは対照的に、大塚先生は実際の直接的な物差しを持っていた。学問的な野心の塊であり、学術賞など欲しいものを口に出し、それを獲得するために常識外れの努力をした。目論見通り賞を受賞すれば満面の笑顔でそれを誇った²³⁾。学者の価値を海外の査読ジャーナル掲載した論文数に換算した。当初私が大塚先生に抱いた印象は、骨の髄までシカゴ大学 Ph.D²⁴⁾。

2-2. 苦悩の博士院生時代の幕開け

大塚先生からは、経済学を基礎から学ぶように指導された。博士の松本さんはとにかく、修士一年の真野君の方が私よりはるかに経済学の基礎を理解していた。私が出会った4月に、真野君は学部の卒業論文を大塚先生と英語にして国際学術誌の *Journal of Japanese and International Economies* (JJIE) に投稿した。その論文は査読審査を経て、翌年には刊行された (Mano and Otsuka 2000)。JJIE はスタンフォード大学の青木昌彦教授が中心となって創刊された日本を代表する国際誌である。

当時の都立大学の教授陣の大半は、米国の有力大学院で Ph.D を獲得した研

23 瑞宝重光章に輝いたお祝いに、オンラインで行われた2022年の「大塚ゼミ OB・OG 会」。そこで、私は大塚先生に次の祝辞を伝えた。「大塚先生が紫綬褒章、瑞宝重光章などをとることは昔から予測していました。今後は文化勲章を受章すると予測しています」。

24 大塚先生の時代は日本人でシカゴ大学 Ph.D は数少なかった。同時期にシカゴ大で学んだ人は、野村証券社長となる氏家純一氏、日銀総裁の白川方明氏などがいたという。1980年代、大塚先生は東大の院生の中で有名人だったそう。情報が少ない時代だったので、大塚先生がシカゴ大学の大学院でとった講義ノートは、10数年後に東大の院生の中に流通していたからだ。園部先生も東大の修士課程時代にそのノートを読んでいたという。

究者が集結していた²⁵⁾。しかも、大半は30代で精力的に論文を執筆している最中である。都立大学は小さく地味な印象があるが研究の梁山泊であった。博士課程の学生にはなったものの、私は経済学の基礎力が全く欠如していた。大塚先生からは、コースワークの先生のもとに行って、自分の現在の実力を正直に伝えるよう命じられた。もしも自分のレベルではついていけないと考えたら、学部レベルからやり直すように伝えられた。そんなわけで、大学院初年度のミクロ経済学担当の大和毅彦氏や計量経済担当の戸田裕之氏のもとに相談に赴いた。

理論経済の最高峰ロチェスター大学 Ph.D のゲーム理論家の大和氏はすでに *Journal of Economic Theory* などフィールド・トップジャーナルに複数本の論文を掲載していた。朗らかな性格で私にも親切に対応していただけた。博士ならば時間はないので、基礎中の基礎だけ学んだら学術論文を読んで自分の研究を進めるようアドバイスされた。授業では、当時の定番だったヴァリアンのミクロ経済学の原書がテキストだった。私は修士論文を発展させ市場取引の発生過程を分析するアイデアを説明した。非常に興味を持っていただき、大いに期待できるテーマだとコメントを戴いた。それがきっかけで、しばらくの間、大和研究室の院生と共に関連論文を読む場を設けていただいたこともあった。

強烈だったのは、すでに *Econometrica* や *Review of Economics & Statistics* などトップジャーナルに論文を複数掲載していた戸田氏である。世界最高水準の計量経済講義をすると豪語し、自作のテキストは当時の大学院定番テキストである William Greene の水準より高いという。凍りついている私に対して、計量経済の問題を示し、研究室に設置している白板に目をやりながら解いてみるように命じる。全く解けないと返答すると、私が戸田氏の講義をとるのは非常にリスクだという。そして、計量経済学の基礎は院生の松本氏と真野君に手ほどきしてもらうように指示された。彼らは、前年度に戸田氏の大学院講義を受

25 私が大大学院博士課程に入った時点では大塚・園部グループ以外に、戸田裕之氏（イェール大 Ph.D）渡部敏明氏（イェール大 Ph.D：現・一橋大教授）、大和毅彦氏（ロチェスター大 Ph.D：現・東京工大教授）、浅野哲氏（ウイスコンシン大学 Ph.D）、大森裕浩（ウイスコンシン大学 Ph.D：現・東大教授）福島隆司（ニューヨーク州立大学バッファロー校 Ph.D）などが在籍していた。

け、その内容をよく理解しているという。

大塚先生にその事実を伝えるとリスクをさせ、基礎授業をとるようにすすめられた。園部先生伝えると、真逆の反応で「戸田君の授業は絶対に受講するように」と強く促された。後で知ったことだが、園部先生と計量経済担当の戸田氏と渡部敏明氏は東大からイェール Ph.D に至るまで同じコースを歩んでおり、戸田氏と渡部氏は園部先生の後輩だった。この状況について、計量経済学の隣接分野の統計学の大森裕浩氏にアドバイスを求めたこともある。

大森氏は物静かで紳士的、そして優しい人柄だった。戸田氏が世界最高の講義をする宣言した話をする、「戸田君はそんな無茶なこと言ってるの?」という反応。大森氏は戸田氏よりも1学年上で、東大を出てからウィスコンシン大学に進み Ph.D をとっていた。すでに学部時代から大森氏、戸田氏、渡部氏の3人で勉強会をして、統計学の証明問題を解いた仲だという。基本を理解するために、その時に使っていたテキストを紹介された。1983年に出版された岩田暁一『経済分析のための統計的方法』。ページを開けると複雑な数式が目飛び込んできて、眩暈がした。

真野君のほかにも院生仲間は優秀だった。彼らと私の基礎力には歴然とした差があった。恥を忍んで院生部屋で、松本さん、真野君、申寅容さん（亜細亜大学教授）などに、様々な基本知識を教えてもらった。これらの院生仲間は親切で優しく丁寧な人格者達だった。これらの院生仲間は私の恩人と言っても良い。戸田氏の助言に従って松本さん、真野君に計量経済学を教えてもらった。真野君は2回目となる戸田氏の授業に出席していた。戸田氏の質問にもすらすらと答える。ミクロの大和氏の講義も一緒に出席した。やはりすべて理解しているのが歴然だった。教員の中でも真野君は頻繁に話題になっており、全員が一致して真野君の能力の高さに太鼓判を押していた。

大和教授のヴァリアンの講義が前期で、後期は大学院カリキュラムにはない大塚先生直伝のミクロ経済の特訓があった。大塚先生が院生の頃に使ったテキストを用いた。まずはハーシュライフアーの Price Theory というテキストで基礎を学んだあとに、シカゴ大学のノーベル賞受賞者であるベッカー教授のミクロ経済学のテキストを使った。院生は事前に中身を読み、問題を解いておく、

講義では院生の答えの報告である。ベッカーの問題は何を意味しているのかもあまり分からないような、難問が多かった。1970年代初頭に書かれた本なので先端的な知識学ぶわけではなく、経済学の基本知識を組み合わせれば解けるはずなのだが、うまくいかない。問題を解くために真野君と2人で何時間も院生部屋で議論した。数年後、真野君もシカゴ大学の大学院でベッカーの授業をとったそうだが古いテキストこそ使わないが、オリジナル問題は昔と変わらず難問・奇問の類だったという。大塚先生によると、答えを出すことが目的ではなく、自分の頭で考えること自体が重要とのこと。確かに論文を書くときは答えが分かっているわけではないので実践的な訓練だったともいえる。

大塚・園部プロジェクトのデータ整理のためにエクセルを使う必要があった。私はエクセルの使い方をほとんど知らなかった。ある日、松本さんに頼んでエクセル利用の個人レッスンをしてもらった。2人で小講義室に行き、松本さんの質問を受ける。

松本：「山村さん、フィルタ機能知ってますか？」

山村：「知らない」

松本：「ソート機能分かりますか？」

山村：「知らない」

松本：「ウィンド枠の固定の意味わかります？」

山村：「実は全部知らない。私は何も分からないので、イロハから教えてください」

涙目になりながら私は懇願した。学部生でも出来ることを、30歳の博士院生が出来なかったのだ。哀れな私がそこにいた。他に誰もいない場所での個人レッスン。嫌な顔も、私を蔑むこともなく、基礎中の基礎からエクセルの使い方を教えてもらった。相手のレベルに合わせた非常に上手な教え方だった。松本氏は北海道出身で独特の大らかさがある。同郷の誼に救われる思いだった²⁶⁾。

26 その後、松本さんは南カリフォルニア大学のパネルデータ分析の大家 Xiao 教授のもとで Ph.D をとり、Xiao 教授との共著が計量経済学のトップジャーナル Journal of Econometrics に掲載される。帰国後は政策研究大学院大学（GRIPS）でテニユアをとり、同僚となった園部先生の右腕として活躍する。そして故郷への帰巢本能のまま北海道に戻り、今は小樽商科大学の教授となる。

大学院の初球から中級のミクロ経済学、計量経済学を学ぶ一方、大塚・園部プロジェクトの仕事も進めねばならなかった。

都立大博士に入った頃はまだ、青山学院の速水先生の研究室にも出入りしていた。ある日、都立大で任された研究プロジェクトの一部について報告した。報告している最中に速水先生が大あくびをする。速水先生の反応は非常に厳しいもので、「そんな研究をやるために、都立大に行ったわけではないだろう!」と叱責を受けた。大塚先生の方針を伝えると、「大塚君がそんなつまらないプロジェクトをやるわけがない」火に油を注いだ。私はプロジェクトの全体の枠組みと、その中での自分の担当部分の位置づけや意味を理解していなかった。つまらぬ報告になったのは、私の能力不足が原因だった²⁷⁾。

2-3. 大塚・園部プロジェクト

大塚・園部プロジェクトの研究会は毎週土曜日に行われた。大塚先生、園部先生、松本さん、真野君、矢口さん²⁸⁾、私（山村）と、正式メンバーではないが、オブザーバーとして中国経済が専門の村上直樹教授（現・日大教授）も出席していた²⁹⁾。毎回、院生のうち2人一本ずつが海外の関連論文のサーベイを

27 青山学院大学の速水研究室を訪れる際に、時おり近辺にある「岡本太郎記念館」に立ち寄った。もともとは岡本太郎氏の私邸である。屋内には岡本氏が作品制作していた頃のアトリエがそのまま保存されている。その中に身を置くことで、私は失意から救われた。

28 速水先生の青山学院のゼミ出身で、博士から都立大（現・拓殖大学教授）。

29 村上教授は都立大学大学院で博士号を取得した先輩にあたる。劉徳強学芸大学准教授（現・京大教授）はときどきゲストとして研究会に参加していた。劉徳強氏は北京大学からの留学生で、日中国交回復後の初めての国費留学生だったという。村上教授、劉徳強学芸大学准教授（現・京大教授）と共に大塚先生の中国郷鎮企業研究を進め、比較体制研究の主要雑誌 *Journal of Comparative Economics* に論文を掲載し日経・図書文化賞も受賞していた。空間経済学の専門家として、大塚ゼミのOBの錦見浩司氏（当時アジア経済研究所所属）を招いて特別レクチャーが開催されたこともある。ペンシルベニア大学に留学中に、藤田昌久教授らが空間経済モデルを開発しているのを目の当たりにしていたという。優秀なうえに、明るく優しく笑顔が印象に残る人で、空間経済学分野の研究者からの人望が厚かった。私も「応用地域学会」に入会する際に推薦になっており、お世話になった方である。錦見浩司氏は2010年1月23日に逝去された。心臓の持病を抱えていると伝えて聞いていたが、信じられない思いだった。命日の前日である2022年1月22日に開催されたオンライン大塚ゼミOB・OGでは黙祷を捧げた。

する。論文を書くときには引用する必要があるものばかりで、真剣に読み込んだ。ある時、ベッカー教授がマーフィー教授と書いた論文を読んだ。Journal of Political Economy に掲載された論文であるが、その中で Coordination cost という言葉が出てきた。これは、Transaction cost の一種である。

大塚先生によれば、ベッカー教授は Transaction cost という言葉を決して使わないという。いつまでたっても、Transaction cost のない世界の分析ばかりしてたおかげで次第に影響力を失ったのだという。本人もそれを自覚しているようだが、意地でも Transaction cost という言葉を使うのを避けているのだろうという見立てだ。大塚先生自体ベッカーを信奉していたが、ベッカー教授の弱点を批判的に把握していたのである。

夏になると、大塚先生、園部先生と共に備後産地調査を行った。広島県被服協同組合の協力のもと、産地企業の社長と面会しインタビューを行い、調査票の確定を行うことが目的だった。そこで私は調査のノウハウを学び、次回以降は私一人で調査を行う段取りだった。調査出発前に有力企業の社史など備後の縫製業の資料を読み込む必要もあった。本来は修士課程で終えるべき経済学の基礎習得と博士課程で求められる研究論文執筆の準備を同時に行っていたわけである。あまりにも無謀な試みであり、私は苦悩の日々を送ることになる。

初めて参加した広島県の予備調査では、新市町にある広島県被服協同組合を拠点に1日に3件ほど地場企業の社長等に面談し企業の歴史をきいた。宿舎に帰ってきた後は、大塚先生、園部先生と3人で昼間のインタビューで得た情報を整理し事前に考えていた仮説を修正し、本調査の質問票を確定していく。地道な作業だが、意義ある研究成果をあげるには事前準備が重要であることを学んだ。

一通りの作業を終え夜になると大塚先生、園部先生と居酒屋で酒を飲んだ。一旦、懷に飛び込むと大塚先生は愉快で気さくな人物であることが分かった。大塚先生は北海道大学ではボート部に在籍していたという。大学時代は不勉強で、ボートばかり漕いでいたという。卒業を前に心を入れ替えて、大学院へ入ろうとするが、良い指導者がいなかったという。そこで、全国の農業経済学者のもとを訪問し、様子をうかがっていたという。その過程の中で、速水先生と

出会い、都立大の院生になったという。速水先生によれば、大塚先生も私も、師匠を求めて彷徨い速水先生にたどり着いた。その意味で、大塚先生と私は共通していたという。私は札幌市で生まれ育ったので北大には親近感がある。大塚先生と私は同じ速水門下で、都立大大学院の先輩と後輩という関係である。直接的で厳しい言葉も、その背景には愛情があることにも気付いた。大塚先生が大規模プロジェクトを成功させることが出来たのは、親分肌的な性質による。

園部先生は、武蔵高校を経て、東大を首席を首席で卒業する者に送られる大内賞、さらにイェール大学大学院では優秀な院生に与えられる賞を受賞しているという。マンガやドラマに出てくるような経歴で、私とはかけ離れた学問的な出自である。人生の中でほとんど出会ったことのない世界にいた人である³⁰。園部先生からすると私は珍種であり、そのために興味深い存在であったと思う。比較的年齢も近いので、どちらかと言えば兄貴分的な存在となった。

私にとって、2回目の備後地方の縫製業調査は園部先生と2人で赴いた。昼間は中小企業の社長へのインタビューや現場の視察など忙しく過ごす。東京へ戻ると、計量経済学の試験が待ち構えている。園部先生に戸田氏の自作テキストと、過去の試験問題をみせた。あまりにも難しいことを理解してもらおうとしたのだ。その内容をしばらく確認した後に、園部先生は感想を述べる。



アジア開発銀行研究所を率いる園部哲史先生

30 園部先生はもともと理論研究者だった。私と出会ったのは、園部先生が実証研究に鞍替えして間もない頃でもあった。

「何だこの程度か。どの問題も簡単だ。これぐらいできで当たり前だろう。すべて出来るはずだ」

落第することは許さないという雰囲気である。実は戸田氏の試験の1問目だけは私にも理解できた。試験ではそこだけは回答できて、「お情け」で合格となった。園部先生は、戸田氏から私の受講の様子をきいていたようで、試験の結果も知っていた。都立大の院生は、大塚・園部ファミリーの院生以外では、渡部氏の門下生が多く、渡部ファミリーが存在した。どうやら、東大・イェール Ph.D の同窓である若手3教授の間で、院生の話題で盛り上がっていたようだ。

園部先生は厳しい一面があったが、共に過ごす日常は愉快だった。私にとって未知の世界の話を面白おかしく教えてくれる。東大の学生時代は、宇沢弘文教授のゼミに出入りしていたという。宇沢教授は日本人で最もノーベル賞に近づいたとされる伝説上の研究者であるが、奇人としても有名であった。宇沢教授はゼミの後は学生を引き連れてよく蕎麦屋に行きビールを飲んでいたり。愉快に「ホラ話」をすることも度々。極めつけはアメリカで大女優エリザベス・テイラーと恋愛関係にあったという話である。園部先生は宇沢教授の息子と武蔵高校時代からの友人だという。園部先生が「エリザベス・テイラーとの熱愛」のホラ話に関して、息子に苦情を伝えた。「彼なら、その可能性はあると思うよ」という息子の反応に呆れたという。

ある時、園部先生の部屋を訪問し研究上の相談をしている時に、ロナルド・コースの話題になった。園部先生は「コースは脳味噌取っただろう」と当たり前のように仰る。私は全く知らない話である。何か脳に重大な問題があつて「脳味噌取る」大手術をうけたと考えた。「初めて知りました、コースも大変だったんですね」と神妙に私は応じる。しばらく会話をしても、話が微妙にずれる。よく確認すると、園部先生は「コースはノーベル賞獲っただろう」話したことが判明した。破顔一笑する園部先生の姿が思い出深い。風変わりな珍種である私の言動は、園部先生の気晴らしになったような気がする。

大塚先生、園部先生とは大人数はもとより、少人数あるいは2人で酒を酌み交わした。そして私は大塚ファミリーの一員となっていた。都立大に入った

当初は速水先生の共同体理論を血肉化し、発展させることを目指していた。大塚先生からは、私の議論は速水理論そのものであり、何一つオリジナリティがないと指摘された。大物研究者の門下生であまりにも師匠との距離が近い者は大成しないという。自分なりの考え方がなければ、研究者として存在する価値がないという訳である。大塚先生からアメリカに留学する気がないならば、近場で武者修行せよと指令が出た。

2-4. 武者修行に出る

そんなわけで、アメリカから帰国間もない東大の澤田康幸氏の大学院講義に出席することになった。スタンフォードの院生時代から日本の開発経済学関係者の間では知られた存在で、速水先生からも期待されていた俊英であった。ローテクで現場型の速水・大塚とは違い、最先端の知識を盛り込んだ講義内容であった。当時、澤田教授は駒場に所属しており「国際開発論」といった感じの名称の大学院講義を担当していた。経済学を専門的に学んでいない学生も多数受講登録しており、一回目の講義では50名以上の学生がいた。しかし、澤田教授が示した講義内容は大学院レベルのミクロ経済学と計量経済学の知識を前提としたものだった。おまけに、論文は英語で執筆し、査読付き国際誌に掲載を目指すことを促された。「刊行するか朽ち果てるか (Publish or perish), そのことを忘れないように」。新進気鋭の澤田教授の、言葉が鳴り響く³¹⁾。

2回目の講義出席者は初回の三分の一程度。ほぼ全員が本郷で経済学を専門とする院生であった。皆優秀な人ばかりで、いたたまれない気持ちで出席していたことを覚えている。ある日の講義では、神取教授のゲーム理論の論文が取り上げられた。修士の院生が報告担当。周囲の人のささやき声が聞こえてくる。「数学オリンピック金メダル」。高橋悟という人で、東大の中でも突出して優秀な存在だという³²⁾。当時はオハイオ州立大学に所属していた大垣昌夫教授が *Journal of Political Economy* に発表した論文も取り上げられた記憶がある。最

31 澤田教授の教育能力は高く、澤田ゼミから数多く若手の有力研究者が育った。庄司匡宏氏（東京大学准教授）、田中万理氏（一橋大学准教授）、室岡健志氏（大阪大学准教授）などである。

先端の研究に触れることは出来たが、悲しいことに、私の能力ではあまり理解できなかった。Ogaki と記された人が日本人であることを知ったのは、しばらくしてからである³³⁾。過酷な経験であったが、私の視野が広がったことは間違いない。

2-5. 大塚啓二郎の教え

大塚先生は当時すでにトップジャーナルの *Journal of Political Economy* を含め100本近くの学術論文を査読付き国際誌に掲載していた。アメリカ農業経済学会賞や日経・経済図書文化賞も受賞。しかし、1979年にシカゴ大学で博士号を取得し帰国後は長らく低迷していた時期があった。いくら論文を書いて投稿してもすべて不採択。自動車レースに例えるなら、アメリカの一流大学で Ph.D を取得しても、それは免許を取ることと同じ。実際にレーサーとして活躍することとは大きな隔たりがある。ハーバード大、シカゴ大など一流大学で Ph.D を取得しても、研究世界で活躍する者は三分の一程度という。

大塚先生からは研究室の本を自由に閲覧することを許されていた。研究室で大塚先生の留守番をしていた時に、棚にある本の中に秋野正勝氏の追悼本を発見した。秋野氏は北海道大学卒で速水先生との共著はトップジャーナルの一つ *Quarterly Journal Economics* にも掲載されている。まさに大塚先生の先輩である。将来を嘱望されながら若くして逝去された伝説上の人物である。一流誌に業績を残したからこそ、それだけ研究の苦悩も大きかったように思われる。秋野氏への大塚先生の追悼文を読みながら、私は一人立ちすくんでいた。

大塚先生は研究者としての危機を乗り越えた後に、飛ぶ鳥を落とす勢いで研究に邁進していた。大塚先生のアドバイスは分かりやすく、時にはユーモアに満ちていた。研究者はエンターテイナーでなくてはならない。ダメ研究者の

32 高橋悟氏はその後、ハーバード大学で Ph.D を取得し、現在シンガポール国立大学の教授である。2021年に日本経済学会から「中原賞」を贈られる。シカゴ大学の博士課程に進学した都立大の後輩の真野君によれば、アメリカでも院生時代から高橋悟は注目を集めていたという。

33 その後、大垣教授は帰国し慶応大学教授になった。そして、私は個人的に交流するようになる。それがきっかけで、行動経済学会に入会した。また、西南学院大学でチャペル講話や学術講演会をしていただいた。

報告や論文は、下手糞な歌をカラオケで熱唱することと同じ。素人の歌は自己満足にすぎない。我々はプロのシンガーでなければならない。聴いている人を心地よくさせ、楽しませる努力をするのだ。そのためには、サービス精神がなければならない。読者が一読して理解できる明快で簡潔な文章。一目で意図が伝わる図や表。小説家のようにハラハラドキドキのストーリー展開に読者を引きずり込むことも重要だ。英語のネイティブで英語学を専門的に学んだ人によれば、速水先生の英語はロールスロイスのように格調高い。大塚先生の英語はトヨタカローラのように大衆的で分かりやすいという。学術論文の文章は、もったいぶる必要は全くない。論文で必要なのは、自分の考えを正確に伝えることで、目的地につくことが出来ればどの車でも良いのだ。

大塚先生の業績は膨大だったが、トップジャーナルから農業経済分野の中堅クラスのジャーナルまで、研究成果の質にはばらつきがあるように見えた。一流誌に載せるときは全力投球で、中堅クラスのジャーナル用の論文は気軽に力を抜いて書いているのか質問したことがある。大塚先生の返答は、次のようなものであった。

「全く違う、いつでも全力投球、自分のすべてつぎ込んで論文を書く。それでも不採択されることも多い。一流誌から始まって論文が掲載されるまで、投稿を続けるのだ。」

苦心して傑作と信じた論文を投稿し、不採択になる。非常に大きなショックである。多くの者は、それで諦めてしまう。しかし、世界には数多くの選択肢が残されている。上位ジャーナルから順番にチャレンジを続ける。その粘り強さと根気が必要不可欠である。これが、研究者として長年にわたって活躍するための条件である。一流研究者でさえ、ランクの低い雑誌に掲載された論文も苦労苦闘の末の成果なのだ。これは、今現在の私の実感でもある。大谷翔平がホームランを量産する一方で、膨大な数の三振も喫していることに似ている。

園部先生から学んだことは、学術論文の編集長や査読者の心理を理解することである。アメリカの一流研究者は、自分が最も頭がよく優れた研究者だと信じている。投稿してきた論文が理解できないとすれば、著者の能力が低いに違いないと考える。マトモな論文ならば、自分が理解できないはずはないという

ワケだ。大概是超多忙で他人の論文の評価は嫌々やっている。自分の研究に気力体力を温存するために、査読仕事は脳味噌の半分くらい使わない。そんな相手を納得させるためには、頭を使わなくても分かるほど明快に論文の価値を伝える工夫が必要だ。

多くの投稿論文は、最後まで読まれることもなく不採択になる。私が院生時代に初めて書いた論文に対する大塚先生の印象は、「面白い内容をつまらなくしている」というものだった。さらに、大塚先生が査読者だったら、途中で読むのをやめて査読報告書を書くという。読むのをやめる大まかなページまで示された。それは、論文の半ばくらいだったと思う。事前の報告を経て、大塚先生からは執筆を許された内容である。書き方のどこが悪いのかも詳しく指摘された。米国の大学院では、このような細かな指導はないという。コースワークを終えたら、あとは見様見真似で論文を執筆するのだという。少なくとも当時は一流大学の Ph.D を取得する者も、実際の論文執筆のノウハウは教えてもらえないのだ。

私の博士時代の研究は、大規模プロジェクトに組み込まれていた。研究の始動から調査、仮説構築、推計、論文執筆、専門誌への投稿、雑誌から届く修正要求への対処。これら、すべての過程を目の当たりにしている。大塚先生によると、論文のスタイルは多様であり、研究者の特性にあったスタイルを身に付ける必要がある。丁度、相撲力士の得意型のようなものだという。たとえば、上手投げが得意なら、その技をかけるための立ち合いの工夫が必要となる。大塚先生からは私の能力に合致した論文スタイルを提案された。叩き上げ研究者の私は、非常に実践的に学術誌に論文を掲載するノウハウを学んだのだ。

2-6. 一筋の光明がさす

博士課程の最初の2年間は寿命が縮むほどつらい時期だった。身長171cmの私の体重は96kg までになった。修士の頃は70kg 程度から26kgの急増である³⁴⁾。ストレスによる過食と飲酒のために完全な肥満体となっていた。

ある日、いつものように真野君が院生部屋で真向かいの席でせっせと研究に励んでいた。私は、それとなく声をかけた。

山村：「真野君、キンシャサ作戦知ってる？」

真野：「知ってますよ。モハメッド・アリの試合でしょ？」

1974年にアフリカのザイールのキンシャサで、チャンピオンのジョージ・フォアマンに全盛期を過ぎたモハメッド・アリが挑戦した。圧倒的なパワーとパンチ力を誇るフォアマンの圧勝が戦前の大方の予想だった。試合が始まると、フォアマンが一方的に攻め立てる、一方的な展開となる。ロープに追い詰められ、今にも倒れそうなアリ。アリは耐え続けながらラウンドが進む。打ち過ぎて疲れたフォアマンの動きが鈍った時に、突如としてアリは一気呵成に攻め立てる。そして、フォアマンはキャンパスに大の字になってノックアウトされる。第8ラウンドのことだ。

山村：「俺がキンシャサ作戦に出ていることに気がついてる？」

真野：「大逆転する作戦ですか？」

山村：「その通り。今、俺は論文を書けないように見えるだろう？俺は打ち疲れを待ってるんだよ。最後には大逆転で俺が勝つ」

真野：「誰の打ち疲れを待つんですか？山村さん逃げてるように見えませんよ」

山村：「そのように見えるのか？」

真野：「油を売ってる暇があるなら、早く論文書いてください。」

また別の日には、次のようなやり取りをしていた。

山村：「真野君は、スピード重視だな」

真野：「そうですね」

山村：「俺はスピードよりもパワー重視だ。だからウェイトを増やしている」

真野：「何の話しているんですか？」

34 当時、南大沢の都立大学から徒歩20分くらいの場所に、「二郎ラーメン」があった。特大ラーメンで有名な「二郎ラーメン」の系列店の中でも、とりわけ盛り付けが多いことで知られた。院生仲間の申さんに連れられて初めて訪れた。券売機には大、中、小とあった。腹が減っていたので、「中」を買おうとすると申さんにとめられた。「小」から始めるようすすめられた。出てきた「小ラーメン」は、通常のラーメン屋の3人分ほどはある「特大ラーメン」であった。必死になって食べきった達成感を覚えている。20分ほど徒歩で帰る道すがら、二郎ラーメンを食べると根性が付く。きつと頭もよくなる。共同論文も査読誌に掲載されるだろうと話をした。我々は、日常の些事も研究に結び付け、幸運が転がり込むのを期待していたのである。

山村：「スピードとパワーはトレードオフの関係にある。体重を増やせばパワーは出るが、スピードは落ちる」

身振り手振りで、体重別のパンチのスピードの違いを見せてみる³⁵⁾。真野君は瘦型体系で、私は肥満体なので、対照的なケースであることを説明した。荒唐無稽で脈絡のない戯言をききながら、真野君も息抜きが出来たように思う。余りにも研究が捗らないので、冗談を口にしてストレスを発散せざるを得なかった。当時、私は院生部屋で冗談ばかり言っていたように思う³⁶⁾。

苦難の日々だったが、徐々に研究を進めることも出来た。最初の備後産地の縫製業産地の論文は、2002日本語で単著としてまとめた。推計方法を洗練させた英語論文は大塚先生、園部先生との共著として英語にまとめられた。データ集めと推計は私が担当し、本文は大塚先生が執筆し、創刊間もない *Journal of Economic Geography* (JEG) 誌に投稿した (Yamamura, Sonobe, Otsuka, 2003)。国際比較プロジェクトの一部を構成する要素なので、大まかな論文の方向性は大塚・園部先生が決めていたが、私なりの味付けと工夫を凝らした論文で、JEG の編集長の Richard Arnott 教授から非常に好意的な評価を受けた。大塚先生によれば、とても珍しい成功例だという。まだ紙媒体でやり取りする時代だったが、Richard Arnott 教授の手紙は今も大切に保管している。備後論文完成には約3年間に要した。大塚先生によれば、異常に時間がかかったが、私の成長を見守っていたという。

次に取り掛かったのは、浜松のオートバイ産業の研究だった。備後研究と同じように、大塚先生、園部先生と現地調査を行った後に、再度園部先生と二人で追加調査をした。それからは、私一人で調査と研究を進めた。備後産地の研究で試行錯誤したおかげか、研究開始から1年未満で有望と思われる推計結果を出し、大塚・園部研究会で報告した。当初プロジェクトには含まれていなかった企業生存の分析を中心としたものだ。集積経済が及ぼす企業の参入退出の長期分析である。大塚先生によると、この結果で論文が書けるという。

35 私は空手を習っていたことがある。

36 つい先日、真野君に上記のエピソードを話してみたが忘れていた。私が苦悩の只中にいた印象もなく、順調に院生生活を送っていた印象だという。

大塚先生も、園部先生も驚いていた。備後産地研究で膨大な回数の試行錯誤を経験したため、推計の失敗パターンが分かり始めていた。逆に言えば、無駄な推計をせずに、有望な推計をすることが出来るようになっていたのかもしれない。備後産地研究の半分以下の時間で、浜松研究は英語論文にまとめられた（Yamamura, Sonobe, Otsuka, 2005）³⁷⁾。

2-7. 若手研究者との交流

浜松研究を書いた頃には就職活動をする必要に迫られていた。大塚先生、園部先生は、多方面に私の宣伝をしていただいた。当時都立大に着任したばかりの若手研究者には、スタンフォード Ph.D の戸堂康之氏（現・早大教授）、東大博士の村田安寧氏（現・日大教授）、神林龍氏（現・一橋大経済研究所教授）が在籍していた。現在ではいずれも日本を代表する研究者である。院生とはほぼ同年代なので、あまり上下関係を感じずに接していただけた。特に村田氏と神林氏は20代後半で私よりも数歳若かった。すでに東大の大学院時代に注目を集める論文を執筆しており、海外の Ph.D よりも早く就職していたのである。彼らの風貌は年齢以上に若々しく、少年の面影を残していた。実際に接してみると、自身の研究に対する自信とプライドを持っていることが伝わってきた。個人的な印象であるが、この頃から日本の博士号取得者でも国際的に活躍する人材が出現し始めたように思われる。

院生仲間の申さんはマクロ経済の専門家で、数値計算が非常に得意であり、完全に自力で日本の査読誌に複数の論文を発表していた。私とは全く異なるタイプなのだが、私が産業集積に関する話をしていると、カリブレーションモデルで分析可能という話が持ち上がった。実証データを使った簡単な実証分析を私が行い、申さんのカリブレーションを担当し密かに共同研究をすすめた。村田氏は空間経済の新進気鋭の理論家で、すでに単著でフィールドトップジャーナルに数本の論文を掲載していた。村田氏に我々の研究の相談に行くと、「不

37 有力専門誌である、Rand Journal of Economics, Journal of Economic Behavior and Organization 誌などに投稿したが、すべて不採択で、最終的に採択されたのは中堅レベルの専門誌（Yamamura, Sonobe, Otsuka 2005）。西南学院に就職してから2年ほど経過した頃だ。

細工なモデルだが、*Journal of Regional Science* のような専門誌なら掲載されるかもしれない」という。当時は、私も申氏も英語で論文執筆することが困難だった。就職のための業績作りのために日本語の査読誌を紹介してもらおうとすると、「日本語で論文を書いたことがないので分からない」という。村田氏はすでに学部生時代から大学院レベルの授業に出席し、数えきれないくらいの研究アイデアをメモしていたという。今はそれに基づいて、次々と論文を書いているという。あまりにも研究に対する意識や気構えが私とは違っていた。

村田氏に相談した研究を結局国際誌に投稿することはなかったが、今考えると非常に悔やまれる。国際デビューのチャンスを逃してしまったのだ³⁸⁾。戸堂氏は我々院生によく激励の言葉をかけていただいた。誰かの日本語論文が不採択になれば、「英語で書けばチャンスは広がる。世界中のジャーナルを探せばどこかに通るかもしれない」と鼓舞され。戸堂氏自身の投稿論文がレフリーから“Far from acceptance”と酷評されている話をしながら、チャレンジ精神を忘れないことが重要と力説された。

よく覚えている場面がある。都立大学に博士論文の原稿を提出する現場に腕組みをした戸堂氏がいた。じっと提出される院生の博士論文をみている。私の順番が来たので、タイトルを告げて提出した。すかさず、「山村さん、何で日本語で書いてるの？ どうして英語で書かないの？」と声をかけられた。予測していたとおりの反応だった。その意図するところは「英語の論文で勝負しようぜ」。辛口の激励であったが、何も返答できずにいる自分が情けなかった。私の研究が国際誌に投稿されていることは、若手教員に伝わっていた。私が英語の執筆も担当していると勘違いされていたのかもしれない。しかし、実際に英文を執筆したのは大塚先生である。私には英語で書く能力は全くなかった。英語で論文を書く自分の姿も想像できなかった。

ある時、京都大経済研究所の柴田章久氏の研究報告会が開催された。理論研究なので正確に内容は理解できないが、気になったことがあったので質問してみた。すると、逆に私が質問され、返答に窮した。アメリカ Ph.D 一辺倒の大

38 この研究は後に、国内の専門誌に投稿し採択された（申・山村）。

塚先生が、国内で唯一評価していたのは大阪大学の博士たちだった。柴田氏は大阪大の大学院から博士号を授与されていた。前出の東大の澤田氏も修士課程は阪大で学び、修士論文の内容を開発経済学のトップジャーナルである *Journal of Development Economics* に掲載していた。実質的に論文執筆指導したのが柴田氏であることも伝え聞いていた。研究会の後に宴会が催されたが、柴田氏の自信に満ちた態度を末席から眺めていた。近寄りがたい空気感があった。

宴会が終了し、駅のホームに立つとすぐそばに柴田氏がいた。私を見つけると近寄ってきて、酒を飲むことを提案された。気が付くと、差し向かいで二人酒盛りをしていた。一次会とは打って変わって、柴田氏は非常に気さくで、面白おかしく時を過ごすことが出来た。阪大では先輩が後輩の面倒をみて、院生時代に国際学術誌に論文を掲載させる伝統があるという。柴田氏も先輩の指導のおかげで、国際的な研究成果を残すことが出来たという。なので、同じことを澤田氏に施したという。大阪大学の経済学者が圧倒的な業績を上げている理由を垣間見たわけである。

柴田氏は当時すでに世界の一流専門誌に数々の論文を発表していた。しかし、留学経験がないため英会話が苦手だという。必要に迫られたので、英語論文を書くことは出来るようになったという。「君も書けるようになるよ」という言葉に救われた。海外の大学院で Ph.D を取得しなくても、研究者として活躍できることが分かって、非常に勇気づけられた。つい数年前、約20年ぶりに、柴田氏と宴会で同席したことがある。過去に一度しか会ったことがないにも関わらず、私のことを覚えていた。事前に園部先生が私の研究を宣伝していたようで、無名の院生である私のことを認識していたようだ。今更ながら、私のために手厚いサポートがあったことを再認識した。

その頃、速水先生は自身の農業経済学の教科書に新たな内容を盛り込み新版を書きあげていた。追加箇所を執筆したのは神門善久氏（明治学院大学教授）で、新版は共著の形をとった（速水・神門2002）。私は、その校正のアルバイトをするために白金台にある明治学院に通った。書籍全体を読んで行う細かな校正作業を通じて農業経済学の勉強ができた。神門氏は小柄で痩身、俳優の加藤嘉に似ていた。しかし、語る言葉は激烈だった。学部から大学院まで一貫し

て京都大学で学んだ神門氏は海外の Ph.D 取得者に対してむき出しのライバル心を持っていた。神門氏によると、彼らは先端的な学問を学んではいるが、そのために皆同じような論文しか書かない。マクドナルドのハンバーガーのようなものである。それに対して自分は、旨いみそ汁のような地味だが味わいのある研究をしている。他の者にはまねのできない熟練技で Ph.D 研究者に対抗するのだ。

私よりも6歳年長の神門氏は、自身の手の平を開き私に見せた。その指先が変形して曲がっていた。当時は、実証研究者はデータを手入力していた時代である。熟練技を身に付けるには、指が曲がるほど膨大な入力作業をする必要があるというワケである。後述する「自前論文」のアイデアを思いついた時期で、神門氏にも研究の概要を紹介した。神門氏の反応は次のようなものだった。研究アイデアを考えるだけでは意味がない。アイデアを口にする者は吐いて捨てるほどいる。英語で論文にして一流誌に載せなければ意味がない。一流誌に載りさえすれば、海外 Ph.D よりも格上研究者になることが出来る。どんな時でも目線を下げず、国際ジャーナルに論文を投稿するのだ。

当時私が身を置いた環境では、米国の最高レベルの大学院の Ph.D を大卒とするなら、日本で博士号は高卒程度の扱いだった。日本の博士号取得者は蔑まれていたし、清野一治教授など一部の例外を除いて日本の博士取得者と米国 Ph.D との間には研究実績に格段の差があった。

神門氏は同じドメスティック研究者として私にアドバイスをおくっていただいたわけである。参考になる部分もあったが、そもそも私は早稲田大学でも最低ランクの偏差値の社会科学部に、浪人の末にやっとめぐりこんだ凡人である。アカデミック世界の早稲田出身者は、政経を筆頭に法学部、あるいは商学部卒である。早稲田の偏差値ピラミッドの底辺にまぐれで入って喜んでいるような私、ピラミッドの頂上には東大に落ちて仕方なく早稲田に來た人が君臨する。早稲田の同窓でも私とは別世界の住人である。当たり前のことであるが、学部から京都大学一筋だった神門氏もまた私にとって雲の上のエリートであった。

優秀な研究者はいくつかのタイプに分かれる。息を吸って吐くがごとく、学生時代から研究アイデアが湧き、思いのままに論文を書き世界のトップ

ジャーナルに論文が掲載される。別に指導者などあまり必要としないタイプ。これは、天才系の研究者。教科書の理解力が異常に早く正確で、素直に指導を受け予定通り学位を取得し、師匠の右腕となっていくタイプ。秀才型研究者だろう。指導教官に学びつつもその指導を鵜呑みにせず、そのもとから徐々に離れて研究者として独立するタイプ。これはヤンチャ系研究者である。少し生意気だが可愛がられるタイプでもある。都立大の院生仲間は秀才系が多かったが、中にはヤンチャ系も存在した。

大塚先生の学部授業の受講者に社会福祉学部の学部生が紛れ込んでいたことがあった。なかなか優秀で本人も経済学に興味を持っていたので、大塚先生が特別に英才教育を施すことにした。社会福祉学科の学部生なのに、大塚プロジェクトの研究会にも出席していた。ミクロ経済学の指導は真野君が個人教授した。学部生で少し生意気な雰囲気もあるが、面白い若者だった。Journal of International Economics など一流誌に複数の論文を発表し、今や新進気鋭の研究者として知られる石瀬寛和君（現・大阪大学准教授）の20年前の姿である。大塚先生、園部先生は政策研究大学院大学に移籍することが決まっていたので、石瀬君は東大の大学院に進んだ。その後は、留学しボストン大学で Ph.D を取得した。アメリカにいる間に、理論に関心が移り開発経済学とは別の道を歩むことになる。松本さんも、真野君も Ph.D 取得後は大塚ファミリーに戻り、今もアフリカなどをフィールドに開発経済学の研究をしている。

一方、直接の関係者以外で、石瀬君が大塚ファミリーの一員だったことを知る者は少ないだろう。石瀬君は、ヤンチャ系研究者の典型例といえよう。それは、私も同じである。数年前、私は箱根駅伝の論文を書き DP にした。学会で数年ぶりに出会った石瀬君から、彼も類似の研究アイデアを持っていたことを告げられた。私に「先を越された」と思ったそうである。専門や研究スタイルはかなり違うが、私と共通したものを感じる漢である。

2-8. 自前の論文の宣伝活動

備後縫製業研究も浜松オートバイ研究も完成したものの、大塚・園部プロジェクトの中でお膳立てされた仕事を遂行したに過ぎない。自前で考え書いた

論文とは言えない。第一著者にしていただいたが、誰が見ても大塚先生の仕事なのである。大企業の社員が会社の看板で仕事をしているようなものである。一方で「俺ならばこう考える」という気持ちを密かに持ち続けていた。備後の調査で現場を訪れ80人くらいの関係者に話をきき、海外の研究論文を読むうちに、自分なりの研究枠組みを思いついた。

過去30年間の縫製業産地を2段階に分け、顔の見える人間同士の共同体ネットワークを使った取引から、非人格的な市場取引への移行の中で、経営者の経験を通じた学習効果と社会関係資本（Social capital）が補完関係から代替関係に変わっていく。一方で、その学習効果と人的資本が代替関係から補完関係に変化する。推計結果は私の予想通りである。私なり論文を書き大塚先生、園部先生に見せたが、あまり関心を持たない。私のミッションはプロジェクトを進めることであり、やることは数多くあるのだ。その頃は浜松研究を進展させている最中であったので、そちらを優先せよという意図はよくわかった。有難いことに、私が思いついた研究を進めることは黙認していただけた。

私としては、「速水ワールド」を自分の中に取り込み発展させている手ごたえがあった。そこで、まずは学外の TEA（Theoretical Economics and Agriculture）という研究ワークショップで報告してみた。やる気に充ちた若手研究者が集結し、活発な意見交換がなされる実質的で有意義な場である。出席者の反応はともよかった。前出の澤田康幸氏や、澤田氏のスタンフォードの先輩 Ph.D の黒崎卓氏（一橋大学 経済研究所教授）などから有益なコメントが寄せられた。³⁹⁾⁴⁰⁾

久しぶりに速水先生に成果報告するために、日本語で書いた論文を送ってみた。後日コメントを戴きに赴くと、「年上の人に論文読んでもらう時には誤字ぐらいはチェックしなさい」と指導された。しかし、表情は柔らかく笑顔で

39 その時の TEA で黒崎氏は特別講演を行った。司会進行役を務めた澤田氏の紹介では「開発経済学のトップジャーナルである JDE に論文を掲載した、開発経済学の中田英寿のような存在」と評した。当時はイタリアで大活躍だったサッカー選手を引き合いに出したわけである。当時の「中田英寿」は今ならば、「大谷翔平」のような存在であろう。

40 黒崎氏は今でも交流のある先輩研究者であり、時には俳優の「阿部寛」について意見交換をする仲である。

「君は調査地とダイアログしているね」と告げられた。私は日本語で最高峰の査読誌である一橋大学経済研究所が編集している『経済研究』への掲載を目指していた。速水先生よれば「少し直したら、『経済研究』に載るよ」との言葉を戴いた。プロジェクト開始直後の報告では叱責されたことがウソのように、しっかりと自分の考え方が評価された。後日、大塚先生に速水先生の反応を伝えると少し驚いた表情で、「昔とは大違いだ。速水さんも、優しくなったな」と語った。暗黒の院生時代に一筋の光が見え始めた⁴¹⁾。

2-9. 院生生活の終わり

私が研究ポストを得られるように、大塚先生、園部先生には各方面に働きかけていただき、私を売り込んでいただいた。早稲田で研究報告をしたこともある。セミナーの主催者は40代前半の清野一治教授だった。応用ミクロ理論の専門家で、30歳頃にはすでに *Journal of Political Economy*, *Review of Economic Studies* などトップジャーナルに論文を掲載していた。早稲田政経から東大の大学院に乗り込み博士を取得後は、大阪大学社会経済研究所などを経て母校の早稲田に戻っていた。清野氏は早稲田ではほとんど唯一のスター研究者だった。厳格な指導で知られ、修士終了後は阪大の博士に学生を送り込んでいた。園部先生の東大大学院時代の先輩で、大塚・園部先生とも研究会などで交流があった。清野氏と早稲田時代に一度だけ、接触したことがある。修士の外国所講読

41 速水先生の見立て通りこの論文は『経済研究』に掲載される。論文末に記された記録によれば、(投稿受け付：2002年2月14日、最終決定：2004年1月14日)とある。『経済研究』に掲載される論文は2種類ある。一橋経済研究所の人は殆ど査読なしに論文が掲載されるので、受付日や最終決定日は記されない。外部の研究者の投稿は、非常に厳しい査読がある。一冊に一本程度しか投稿論文は掲載されない。中堅どころの国際ジャーナル以上に掲載困難とされていた専門誌である。私の場合も2年かけて論文を掲載できた。院生の時に投稿し、論文が採択されたのは西南学院の講師時代である。ちなみに私は西南学院着任後に、備後産地に隣接する児島産地で同様の調査を行った。一人で科研費をとり、予備調査も行いデータを集め、『経済研究』と類似の枠組みで分析を行った。結果は備後産地と同じ。こちらは英語で執筆し、*Journal of Economic Behavior and Organization* (JEBO) というフィールドトップジャーナルへの掲載に成功した (Yamamura 2009)。大塚・園部先生と執筆した浜松オートバイ論文が JEBO に不採択された過去があったので、リベンジに成功したのだ。この論文が、JEBO に掲載されたのが2009年なので、備後産地研究に参加した1999年から10年経過していた。この頃になってやっと、研究者として独り立ちできそうな気がしたものだ。

でなぜかフランス語をとったら、受講生は私だけ。指導教授は清野氏である。風のように現れ、数式だらけのテキストをみせられた。私には理解不能であることは明らかで、清野氏も時間の無駄を避けたい意向だった。その場で履修取りやめとなった。

研究報告の後で、大塚、園部、清野、そして私の4人で酒を飲んだ。清野氏の自信あふれ堂々とした態度は昔と変わりなかった。昔の東大大学院は入ること自体が難しく少数精鋭を集めていた。園部先生によると伊藤元重教授の大学院講義は異常に厳しく、突如飛んでくる質問は高度で難解。秀才ぞろいの院生も返答に窮するような内容で、青ざめた表情で出席していたという。例外は二人だけ。神取道宏氏（現・東大教授）と清野氏だけが、その場で平然と正解を示したそう。話題は多岐にわたっていたが、しばらくすると清野氏から「論文書けよ」と私に叱咤激励が始まった。店を出てから私に上着をつかみ、顔を寄せ「論文書けよ、論文を書き続けるんだぞ!!」と繰り返していた。足元もおぼつかない程、酔っていた。

その後、大塚先生と2人で帰りながら、大塚先生が呟いた「清野さんが山村君に発した言葉は、実は清野さん自身に言い聞かせた言葉だ」。大塚先生の目には、清野氏は研究に苦悩しているように映ったという。大塚先生によると、理論だけでは論文を国際誌に載せるのが難しい時代になっているという⁴²⁾。確かに清野氏の業績リストをみると、この時期に国際誌への論文掲載がない。雲の上の存在だったスター研究者もまた苦悩していることが信じられなかった。

都立大学は小さな大学。経済の院生は修士と博士合わせて10名程度で、その2倍くらい教官がいた。すでに述べた通り優秀な研究者が集結していたが、院生の数が少ないために事前に連絡すれば気軽に相談に乗っていただけた。大塚先生より多方面からアドバイスをもらうように指示されていたので、前出した以外にも様々な教官のもとを訪れ相談したことがある。

大学院2年目の計量経済学の授業では浅野哲先生に手ほどきを受けた。浅野先生はミクロパネルデータ分析の専門家で、私の研究分野で最も重要性が高い。

42 2009年に清野氏は急逝した。Japanese Economic Review から清野氏の追悼号が刊行された。

当時の標準的なマイクロデータの手法を一通り学ぶことが出来た。浅野先生は六本木育ちで、麻布高校から ICU へと進学した。経歴があらわすように、浅野先生は都会的で洗練されていた。大学院入試の時の面接で、大塚・園部先生と一緒に副査を担当していただいていた。都立大の教授陣の中ではマイルドな性格で親切的な指導を受け、研究者として標準レベルの計量分析の手法を身に付けることが出来たことは大きな財産となった。私の就職の際にも、浅野先生には宣伝をしていただいた。恩人の一人である。

速水先生は都立大のことを「スモール イズ ビューティフル」と評した。確かにその通りであった。早稲田の頃のように大人数の大学院だったなら、私は埋没し認知されることもなかっただろう。小さいからこそ凡人なりに存在感を示すことが出来た。都立大は私の居場所になっていた。大規模プロジェクトの拠点として都立大は COE にも選ばれ、日本の代表的研究拠点になることが期待された。私の院生時代は、都立大経済学部の最後の黄金期だった⁴³⁾。

私はオバードクターを一年間した後、西南学院大学へ就職する。大塚・園部プロジェクトは、その後書籍にまとめられ日経・図書文化賞を受賞する（園部・大塚 2004）。一方、都立大経済学部は石原慎太郎都知事による大改革のため壊滅的な状況となる⁴⁴⁾。優秀な研究者はほぼすべて、他大学に移籍する。日本の大学に大きな環境変化が起きていることを示す事件だった。私の居場所だった都立大経済学部は私の記憶の中だけに存在する。

2-10. 福岡に来てからの私

西南学院に赴任してから3年間。大塚・園部プロジェクトで割り振られた仕事を完了させた。しかし、プロジェクトを離れると、自分の力で研究を進めることが出来なかった。危機的な状況だった。院生時代の余力だけでは研究を続けることは出来ない。「優秀」な若手研究者は数年で都市圏の大学に就職活動をして、師匠の下に戻っていく。それは、新任で配属された地方の営業所から

43 過去には都立大教官として、速水先生の他、稲田献一（大阪大学名教授）、西村和雄（ロチェスター大 Ph.D, 京都大学名教授）、伊藤元重（ロチェスター大, Ph.D, 東京大学名誉教授）などの一流教授が在籍していた。

44 石原慎太郎氏はこの原稿を執筆中の2022年に死去した。

本社に帰るようなものである。大きなプロジェクトに参加し、与えられた仕事を忠実にこなしていけば業績も出来る。しかし、これでは他人の俸^{ふんどし}で相撲を取るようなものである。ある種の「サラリーマン研究者」である。私はサラリーマン的生活が嫌で研究者になったのだ。私はこの世の楽園福岡で「脱サラ研究者」を目指した。

当時、近鉄バッファローズが消滅しプロ野球は1リーグ制への意向が議論されていた。プロ野球の産業の分析をすることを思いつき、日本語で論文を書き、日本では数少ない経済学の総合査読誌の『日本経済研究』に投稿してみた。

「興味深く意義ある研究だが、本誌が扱う研究テーマには合致しないので不採用」。だいたいこのような趣旨の決定が届いた。日本語の査読誌で最もフィットすると思われる雑誌に門前払いとなった。海外の査読誌では、プロ野球は *American Economic Review* など総合誌で取り上げられることもあるメジャーなトピックだ。そんなわけで日本の狭苦しい研究世界とは距離を置き、海外の査読誌掲載を目指した⁴⁵⁾。

大塚先生の研究グループには優秀な後輩がたくさんいるので、私のことなど歯牙にもかけない。さらに、関東や関西の有力大学に所属しているわけでもない。研究のプレッシャーは皆無であり、気楽に興味の赴くまま論文を書いた。そのうち他人の評価など、どうでも良くなった。成果が上がる可能性があっても、つまらないと思ったテーマには見向きもしない。専門分野を限定することもなく、楽しそうなテーマだったら躊躇なくやってみる。ワールドカップをやったら、息抜きにサッカーの論文を書き、高校野球で北海道のチームが優勝したら甲子園の論文を書く。映画監督の友人に会うと映画産業の分析を思いつき⁴⁶⁾、クールジャパンが話題になったらマンガ産業分析をする⁴⁷⁾。子育て

45 都立大時代には封印していた *Social capital* (共同体) の経済分析にも乗り出した。当時は日本で、*Social capital* を正面から取り上げ国際ジャーナルに論文を掲載する経済学者はほとんどいなかった。

46 映画監督の「いまおかしんじ (今岡信治)」は大学時代のアルバイトの先輩でる。今岡氏が所属する映画事務所の「獅子プロ」で若手助監督たちと酒盛をしたことも、事務所の引越しの手伝いをしたこともある。

47 『サルでも描けるマンガ教室』の著者の一人である竹熊健太郎氏が遠戚であることを知り、交流したこともマンガ研究をするきっかけであった。

に疲れたら、その体験を発展させて論文ネタにする。西南には女子学生が多いので、ジェンダーギャップが研究テーマにする⁴⁸⁾。災害が起きたら災害の研究者、パンデミックが起きたらパンデミック研究者に早変わりする。正直言って、私には「専門」がない。

西南に就任当初から「経済地理」を担当しているので、とりあえず教科書的なことを教えていた。それが私の義務だからである。授業中は毒にも薬にもならぬ「サラリーマン教師」に成り下がっていた。就任して数年目のある日、データ入力のアルバイトとしえ雇用した学生から唐突に、「自分が楽しいと思うことを授業で取り上げたほうが良いと思います。大学の授業はもっと自由にやっていいんでしょ？」とアドバイスされた。学生から見ても、私の本心はお見通しというワケである。私が教えていたのは、数十年前に提起された定番トピックを羅列しただけの内容だった。退屈でつまらない内容だった。私は誠実とは言えない態度で学生に向き合っていたことを反省した。時代が変わればそれに応じて、学問も発展する。私が関心ある先端的な研究内容を伝えることが、誠実な態度であろう。学生の助言は、私にとって一つの転機となった。その後、私の研究関心を地理的な事柄に結び付け、徐々に自分独自の教材を作るようになった。今や就任当初に扱っていた内容は1割程度である⁴⁹⁾。

人の道に外れず、私自身が楽しければ、それで良い。バックパッカーの頃のように精神の自由を謳歌しつつ論文を書く。そのうち国内外に研究ネットワークができ、共同研究プロジェクトを進めるようになった。気儘だったが、書いた論文はすべて海外の査読誌へ投稿しているので、毎月のように不採用の通知が届く。稀に採用通知もあるが、採用率は1割程度か。当たれば儲けもの。宝くじを買うような気分である。気が付けば15年くらい、そんな生活を続けてきた。

48 『山村富美記念 女性自然科学者研究助成基金』の設立者が遠縁にあたることを知り衝撃を受けた。これもジェンダー研究開始のきっかけとなったのかもしれない。

49 コロナ禍での遠隔授業では動画配信をしている。昭和の予備校講師的なパフォーマンスをヒントにして、冒頭はアントニオ猪木の物真似をしている。コロナ・パンデミックの研究成果など最新の研究テーマを「経済地理」に結び付け紹介している。風の噂によれば、学生は授業を楽しんでいるようだ。

結　　び

本間教授と遭遇した速水ゼミのOB会。青山学院大学の施設で開催された会には、都立大時代および青山学院大学の教え子やその家族も集まっていた。総勢200名ほどになった盛大なパーティである。本間教授のアドバイスを受けた後に、速水先生のもとに行き感謝を伝える。今後のアドバイスを求めると、「40歳までに5本査読付きの学術誌に論文を載せることが出来るなら、その後も研究を続けることが出来る。一流誌でなくても良い、しっかりした査読をする雑誌ならどこでも良い。とにかく5本刊行することが重要」。速水先生は私の能力を考慮して、実現可能かもしれない具体的な助言をされたのだ。さらに、見知らぬ地で研究生生活続ける不安を伝えると、「住めば都だよ」と笑顔。速水先生は東京生まれ東京育ちだが、大学院はアメリカの田舎アイオワ州で過ごし、農水省の研究員だった頃は北海道で生活している。自身の体験に基づく言葉である。

東京を離れ約10年経過した頃。2012年12月24日に速水先生は帰天した。急遽東京まで赴き速水先生の葬儀ミサに与った。聖堂から人が溢れていた。別室でミサの映像を見つめていた。まず、大塚先生が弔辞を読み上げる、さらに2名の門下生が弔辞を読む。そして届いた弔電が読み上げられる。東大名誉教授の小宮隆太郎氏の言葉が印象的だった。「北海道のテニスチャンピオンとダブルスを組んで試合が出来たこと。光栄でした」。速水先生のテニスの腕前は著名な大会のシニアの部で優勝するほどであった。若き日に赴任していた北海道でもテニスで活躍していたのだろう。アカデミックの交流に触れない抑制された言葉に旧制高校の香りがした。ふと既視感を覚えた。祖父の葬儀ミサ。旧制高校OBの空気を纏った^{まじ}大学教授、幼少期の記憶に刻まれた祖父の面影ⁱ。気付いたときに、一筋の汗が背中を伝った。

本間教授が歩んできた道程の周辺を、私も這うようにして進んできた。なかなか険しい道のりであり、自分の能力の限界を感じながら、ギリギリのところを踏みとどまった院生時代である。いつも速水先生、大塚先生をはじめ誰かに支えられていた。

西南学院大学という遠い場所にたどり着き約20年が経過した。開発経済学からも遠く離れた。速水佑次郎のコピーから抜け出そうと考えていたら、予想以上に軌道から外れた。偶然にも速水ファミリーの本間教授と邂逅し、そして分かれていく。本間教授の最終講義で大画面に映し出される速水先生の姿。彼方にあった院生時代の記憶が蘇る。さらに、私がどこから来たのか？昔の私が何を考えていたのか？有形無形に関わった様々な人々のことも思い出された。それをまた忘れてしまう前に、拾い集め繋ぎ合わせてみた。そして、これから何処に向かうのかを考えた。



本間教授の最終講義で映し出された
速水佑次郎先生の写真

気が付いてみると長すぎる私的な備忘録になってしまった。とはいえ、未来のある日、誰かがこの文章に目を通し、私と出会う気がしている。

2022年2月1日、搁筆。

参考文献

日本語文献

- 園部哲史・大塚啓二郎（2004）『産業発展のルーツと戦略：日中台の経験に学ぶ』知泉書館。
申寅容・山村英司（2003）「経済成長と都市圏形成のスピード」『応用地域学研究』8巻2号57-67頁。
速水佑次郎（1995）『開発経済学 諸国民の貧困と富』創文社。
速水佑次郎，神門善久（2002）『新版 農業経済論』岩波書店。
ラジャン・ラグラム（2021）『第三の支柱——コミュニティ再生の経済学』みすず書房。
山村英司（2004）「新しい地域開発学に向けて——共同体的慣習と経済的効率性——」『西南学院大学経済学論集』39巻1号299-366頁。
山村英司（2020）『義理と人情の経済学』東洋経済新報社。

英語文献

- Hayami, Y., Kikuchi, M. (1981). *Asian Village Economy at the Cross-roads*. Tokyo: University of Tokyo Press and Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Hayami, Y., Otsuka, K. (1993). *The Economics of Contract Choice: An Agrarian Perspective*. Clarendon Press; Oxford.
- Hayami, Y., Ruttan, V. W. (1970a). "Agricultural Productivity Differences Among Countries," *American Economic Review*, 60(5), 895-911.
- Hayami, Y., Ruttan, V. W. (1970b). "Factor Prices and Technical Change in Agricultural Development: The United States and Japan, 1880-1960," *Journal of Political Economy*, 78(5), 1115-1141.
- Hayami, Y., Ruttan, V. W. (1970c). "Korean Rice, Taiwan Rice, and Japanese Agricultural Stagnation: An Economic Consequence of Colonialism," *The Quarterly Journal of Economics*, 84(4), 562-589.
- Honma, M., Hayami, Y. (1986). "Structure of agricultural protection in industrial countries," *Journal of International Economics*, 20(1-2), 115-129.
- Mano, Y., Otsuka, K. (2000). "Agglomeration Economies and Geographical Concentration of Industries: A Case Study of Manufacturing Sectors in Postwar Japan," *Journal of the Japanese and International Economies*, 14(3), 189-203.
- Matsui, A. (1996). "On Cultural Evolution: Social Norms, Rational Behavior, and Evolutionary Game Theory," *Journal of the Japanese and International Economies*, 10(3), 262-294.
- Olson, M. (1965). *The Logic of Collective Action*. Cambridge: Harvard University Press.
- Poplin, S. (1979). *The Rational Peasant*. Berkeley: University of California Press.
- Scott, J. (1976). *The Moral Economy of Peasant*. New Haven: Yale University Press.
- Yamamura, E., 2009. "Dynamics of social trust and human capital in the learning process: The case of the Japan garment cluster in the period 1968-2005," *Journal of Economic Behavior and Organization*, 72(1), 377-389.
- Yamamura, E., Sonobe, T., Otsuka, K., 2003. "Human capital, cluster formation, and international relocation: the case of the garment industry in Japan, 1968-98," *Journal of Economic Geography*, 3(1), 37-56.
- Yamamura, E., Sonobe, T., Otsuka, K., 2005. "Time path in innovation, imitation, and growth: the case of the motorcycle industry in postwar Japan," *Journal of Evolutionary Economics*, 15(2), 169-186.

注

- i 山村恒雄 室蘭工業大学名誉教授。鹿児島旧制七高校（1922-1925）から東京帝国大学法学部まで、西南学院大学元学長の古賀武夫名誉教授と同期。祖父が卒業した大正14年第22回卒業生200名のうち文系は100名。祖父が属した文科甲類（英語履修）は68名。その中で49名が東大（法 22名）、15名が京大へ進む。残りはドイツ語を履修する文科乙類は32名で、東大18名（法 7名）、京大11名。文系全体で東大か京大に94%が進んでいる。理系は200名中、東大（29名）、京大（16名）でわずか45%、その他帝大に限らず千葉大、岡山大など進路は多様である。旧帝大以外は医学部へ進学しているケースが多い。当時から文系と理系の学生の意識や文化は大きく異なっていたことがうかがわれる（『七高七〇周年記念誌兼会員名簿』七高同窓会編）。

旧制七高（造士館）は「北辰斜に」の寮歌で知られる。そのライバルは熊本の旧制五校。幼少期に祖父とテレビで観た「日本寮歌際」。祖父と同年代に見える高齢者たちが破帽を被り高校の校章付法被を着てホールの花道を通して入場する。その際に、太鼓をたたきながら出身校の寮歌を歌う。次々と入場するが、「この高校だよ」と祖父に知らされるまでしばらく待った。一高から始まり順番に入場するので、七校登場まで時間がかかったのであろう。「北辰斜に」を意気軒高に歌う同窓生を静かにみつめる祖父。なぜかよく覚えている情景だ。戦中・戦後の人生の屈託を語らぬことを矜持としたような祖父であった。

祖父の葬儀ミサにあらわれた七高の同期生からは祖父の逸話と共に旧制高校の生活をきいた。今思えば五高との定期戦など旧制高校文化についてのオーラルヒストリーである。祖父が在学中の大正12年の記録によれば定期戦を目前にし「7月7日試験が午前中に終了したので応援団約400名は、午後2時ごろより市中を練り歩き一大示威運動をした」、そして「7月25日対五校野球戦の日、各学校は授業を休み各学校は授業を休み（中略）11時には約3万の群衆が雪雪崩を打った。11時半五高軍は選手を先頭に応援団続いて入場しし示威運動を行う。太鼓を打ち鳴らし、白旗を振り喉も裂けよと応援歌を歌い乱舞す。（中略）野田主将は選手を従え応援団に向かい〈我々はきつと七高を破って見せます〉と誓う。午後零時20分、七高軍は法螺貝を吹きたてて去年校と大会で得た優勝旗を打ち立て、数百の応援団はこれに続き〈北辰斜〉を歌って3塁側に陣取る。（中略）。2対0にて五高再び散る。五校軍の涙と共に驟雨沛然として来たりし土砂降る雨の中において（中略）五高軍は万斛の恨を吞んで引き揚げた。これに引き換え勝ち誇る七校軍の歓喜はその極に達し、グラウンド一杯にひろがり跳び舞い踊り狂い、石井野球部長が渡辺館長に代わって挨拶を述べる哉、感激の余り泥濘の中を転げ廻る者すらあった」（江藤武人・作道好男編1970『北辰斜にさすところ 第七高等学校造士館50年史』財界評論新社 pp.235-236）。ほとんど街中を巻き込んだ一大イベントであり、試合の応援合戦はカオスそのものであることが分かる。この狂乱はエスカレートし続け祖父が卒業した翌年の大正15年には対五校戦紛糾事件が勃発する。映画『北辰斜にさすところ』（神山征二郎 2007年）の冒頭では「対五校戦紛糾事件」の史実に基づいた場面が映像化されている。当時の七高旧制高校生は非常に血気盛んで野性味があふれていたようだ。物静かで温厚な人物だった祖父の姿からは想像もできない世界である。そんな祖父も学生時代はときとして乱闘の当事者になったこともあったという。大勢の敵を撃退する戦法を披露していたこともある。相手をわざと部屋隅に誘い込む。背後など死角からの攻撃を防ぎつつ、襲い掛かる敵を一人ずつ撃退する。剣道の技を使って相手の頭部などを打ちつける動きを実演した。その眼光の中には確かに激烈な闘魂が宿っていた。現代でも七高対五高定期戦の様子は『記念試合』（室積光 2007年）、マンガ本『KIMURA』（原田久仁 作画）で活写されている。